教会教育

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年十月一日発行　毎月一日発行　第九巻第十号



10

1961

1961　10　目　次



日本福音ルーテル教会

広島教会

この教会は、昭和三年に伝道が開始され、昭和一七年に松本牧師が転任するまで招聘および任命などで五人の牧師の交代があったが、昭和一七年以後は無牧となり、その間に借家であった会堂はなくなり、ついで原爆のために全く御破算になってしまった。

昭和二五年、この地に再び開始し、十年を経た昭和三五年六月に写真のような会堂の落成を見た。この教会は新しい設備として、会堂に続く保育室をもうけ、防音装置や幼児のための設備をそなえて幼児を手放せない母親が、共に礼拝にあづかる事のできるようになっている。このため若い母親たちが、幼児のむづかりや泣き声を周囲に気がねして礼拝を欠席することがなくなり、新しい時代と共に広島の地に深く根を張りつつある。現牧師は、新進気鋭の柏木信隆師である。



ランドルフ・C・ミラー

日曜学校と牧会区との関係

聖書　マタイ 18・1—14

解説

イエスが子供たちに関心をよせられたことは、当時の世界では珍らしいことであった。それはユダヤ以外の国々では、ほしくない赤ん坊、ことに女の子であったら捨ててしまうのが、その頃の一般の習慣であったからである。イエスが子供たちを迎え祝福されたのは、子供たちの中にある謙そん、驚き、素直、悪ずれのしていない等の美点をご存知だったためで、この純粋さは、大人が神の国に入るために必要な徳である。「子供のような」ということは重要だが、「子供っぽさ」は捨てるべきものである。わたしたちは、向きを変えて、子供たちのようにならなければならない。なぜなら、わたしたちは、父なる神の子供であるから、父なる神に信頼するだけで神の求めておられるような従順な僕になることができるからである。

イエスは、私たちに子供たちを見習うようにと言われただけでなく、子供たちのために責任を負うべきであると言われた。私たちはクリスチャンとして、キリストのみ名によって子供たちを迎えるべきであり、もしも子供たちを傷つけるようなことでもすれば、滅ぼされる。私たちがキリスト教教育を進めて行くための憲章は、ここにある。私たちは子供らを教会に迎え「主の道」に従って訓練すべきである。彼らを清純なまま受入れ、彼らを教育する務めを果すために邪魔になるすべてのものを、自ら取り除かなければならない。

私たちは、たった一人の子供でさえも、軽蔑したりさげすんだりできない。また失うこともできない。それはすべての者のためにキリストは死にたもうたように、またそれは、そのたった一人の者のためにもであるから。神は、すべての子供を深く見守っておられるので、私たちは、神が愛しておられる者を一人でも軽蔑することはできないのである。私たちは、迷い出た羊をさがし求めて尋ね、連れもどす羊飼いのようにならなければならない。たとえ「みにくいあひるの子」を見付けても、喜ばなければならない。なぜなら、そのような者でも、神の家族につらなるものだからだ。

課題

日曜学校は、子供たちに関心を向けているが、牧会区全体におよぶ教育計画は、前号にても述べた通り、すべての者たちのためのものであり、日曜学校においては、子供たちと同じように、青年や成人のためにも準備がな

教会の教育的使命

前月号より掲載をしている「教会の教育的使命」は、来年の夏、アイルランドのベルファストにて開催されるところの世界キリスト教教育研究会議の課題であり、会議に先だって、R・C・ミラーが執筆した Study Guide を翻訳したものである。

しかしこの課題は、単に世界キリスト教教育研究会議のテーブルの上だけで論ぜられ、研究されるものではなく。キリストにあって一つとされた私どもが、主の教えを知り、その教えたもうたところを、多くの人々に教えんとするためには必らず認識し研究しなければならない問題である。

初代教会の頃から師から弟子に、親から子に、老いたるものから若人にと伝えられて来たイエス・キリストの教えは、生活や方法の姿こそかわれ、すべて教育という形で今日まで来た。キリスト教教育という事柄そのものが、一部分的な学問であると考えるのはおかしい。その意味からしても、日本においてキリスト教に関わる人々がこの問題と真剣に取り組まれることを望んで遂次特集していくつもりである。すでに西欧のキリスト教国ばかりでなくアジア・アフリカ諸国が自分たちの課題として学んでいる時、日本がこれに立ち遅れることのないようにしたいものである。

前号掲載

◇教会におけるキリスト教教育

一、教会におけるキリスト教教育
二、啓示
三、説教と教えること
四、信徒
五、使徒職
六、礼典と説教
七、教師とされた信徒
八、教育の務め

◇牧会区全域へのキリスト教教育計画

一、牧会区の真の任務
二、教会生活の更新
三、教える教会
四、伝達と関係性
五、教会と世界
六、聡明な行動

ミラーは、教会の教育的使命を検討するに当り、キリスト教教育の基盤について研究し、各個教会の牧会の任務である日曜学校中心について考えている。

そして「この研究をなす基本的な仮定は二つある。その一つは、教会はまず聖霊の共同体であること。その二は教育というものは、一つの共同社会において行われるものである。すなわち、個々の教会の会衆の中で経験される教会の性格が、そこにおこるキリスト教教育の内容を決定する」と語っている。

× ×

（編集部）

級のはじめに真先にすることは、礼拝であった事柄が言及されるであろう。しかし生徒たちは、教室までこの世を持ち込んで来ているのである。福音の光に照らされて解釈される必要のあるのはこの世である。それであるから生徒は元気づけられるばかりでなく、教えられてこの世に帰えることが出来るし、イエス・キリストによる神の啓示の光のうちに、日常生活の深い意味を知ることが出来るのである。

二　教　師

ヤコブ三・一
Ⅱテモテ四・一一―一八
マタイ一〇・四二―四五

教えることには二つの水準がある。第一は牧会区の活動の質により、全教会員によって設けられているものである。これは生徒の教会における生活に関連して起ってくるすべてのことによって伝わってきたものである。生徒は、級の状態、教材の内容、幹部や教師たちの態度等によって影響されるもので、それは教師が生徒をひとつの人格として関心を持つことによって影響されるのと同じである。

第二は、すべての教師の存在と行いによって設けられているものである。「わたしの兄弟たちよ、あなたがたのうち多くの者は、教師になるべきではない。なぜなら、あなたがたは、わたしたち教える者が、大いなるきびしさをもって、審かれなければならないことを知っているからである」(ヤコブ三・一、グッドスピード訳)。これは、すべての教師が直面する責任の度合である。私たちは、有志の者を求めるべきではなく、最も献身的な教会員の中から教師を選抜し、彼らが必要な訓練を受け、良く教えるための指導を受けるように要請すべきであるというのが、わたしの意見である。彼らは聴明な信仰を持ち指導力を持つ者となり、生徒たちから反応を引き起して、

イエス・キリストにすべてを委ねる者とならなければならない。

リュエル・ホウは、キリスト教教師の本質的な特質を五つあげている。

一、教師は、ある一つの題目に関することを教えるよりも、むしろ聖霊を具現させていくことをおさめなければならぬ。

二、教師は、生徒が自らあるべきための自由を認め、自らの探求によって立つよう、求めなければならぬ。

三、教師は、生徒が自らの速度で活動するとき、聖霊を待ち望み、聖霊に信頼するよう願うものでなければならぬ。

四、教師は、自ら用いようとする方法について心配をしてはならぬ。なぜなら、事情の進展につれ、自由に用いることの出来るものを多く持っているはずだからである。

五、教師は、啓示はいつでも個人的なものなので、伝達も個人的な関係を通してなされるということを信じなければならぬ。①

① Reuel. L. Howe, "A Theology for Education", Religious Education (Nor. Dec. 1959) LIV 494-495.

三　クラスは一つの団体ではない

マタイ一八・一五―二〇

「ふたりまたは三人が、わたしの名によって集まっている所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ一八・二〇)。前にわたしたちが教師について述べたが、これは、クラスはどうならなければならないかについて、多くのことを語っている。なぜなら教師は、「かれらの上に権力をふる」(マルコ一〇・四二)わないからである。教師は自分のクラスを見るが、それは団体ではない各個人から出来ている。彼らはお互いに受けいれたりする必要のある、気の合っていない人

されなければならないことは、これまでの研究から明瞭であろう。しかし私たちは、子供たちに対する教会の責任を考えと時間を持つ必要がある。イエスを最も親しく知っていた一二使徒ですら、イエスが子供たちを、神が特に愛の目を注いで見まもりたもう者として考えておられた事をつかむ事が出来なかった。アメリカの教会は、ホーレス・ブッシュネルが、その著「キリスト教保育」の中に、書いたイエスの勧告、アメリカの子供たちの預言者として立たされている、ということを忘れていた。

子供たちが、イエスに近づくことを、私たちが妨げるなら、かれらを霊的な不具者にすることになり、恐ろしい引き臼を首のまわりにつけられるに価することになる。日曜学校が十分に教会の有機的な一部分となっていなければ、私たちは子供たちの邪魔をしていることになる。私たちが日曜学校を二流の教育活動に終らせるなら、子供たちをばかにしていることになる。また子供たちを軽蔑している人々が教会の中にいて、子供たちを傷つけているなら、私たちのうちにあるパリサイ的な形式主義者のうぬぼれを暴露していることになる。イエスは弟子たちの子供たちを扱うようすをごらんになって憤られたのである。

一 日曜教会学校

マルコ一〇・一三―一六
四三―四五

日曜学校は、一八世紀の終りにロバート・レイクスが霊感をうけて、イギリスのグロウセスターで始めた頃から見れば、はるかに進歩している。今日、多くの国々では、若いクリスチャンの薫育にあたる機関としては、日曜学校がほとんど唯一である。一般の学校ではその他の教育を行なっていて、これは大切なことであるが、薫育の仕事は、キリスト教の共同体の中で行われる。これは一般学校では与えることの出来ないものである。家庭はキリスト教共同体であるかも知れないが、根本的には、それに力を与える教会に依存している。

日曜学校は、各個教会の前進していく活動の一部である。それは契約の民の群れの中で大人や子供の被教育者を教育することが出来ないとい犠牲をはらってまで、個人生活と別個の単位に分けることが出来ないものなのである。もし私たちが新約聖書の教会を神の民、キリストの体、聖霊の交わりと考えることが正しければ、すべての子供たちを全キリスト教共同体の中に、キリストのみ名によって受けいれることを考えなければならない。日曜学校は教会の活動の有機的な一部でなければならない。

日曜学校の中心は礼拝である。これをどのようにするかは、各個教会の慣習によるが、もしも礼拝のプログラムが、全教会員の要求を心にとめているような方法で行われているならば、特に周到な級別礼拝の必要はあるまい。礼拝は、畏れの意識と神を聖とする意識を含んでいる。そしてこれは正しい環境のもとにあっては伝わりやすいものである。私たちは主観的な幻覚によってではなく、客観的な礼拝によって神の前に出るのであって、子供たちも、大人たちと同じように神秘的な聖なる神のみ前における畏れと驚きと尊敬とが可能である。

こうした子供と大人の合同礼拝を強調することは、礼拝における訓練や級別による礼拝の必要性を排除するものではない。しかし多くのキリスト教国における危険は、「これでよいだろう」ですませていることである。礼拝の正しい姿は、私たちの住んでいる世界の用語を用いた。真実で意味のこもったものでなければならないが、神の聖さは、人間の心の有限性の中に切りはなしてしまうべきものではない。

礼拝につづくのは、分級の経験である。分

かったことを発見する。ユダとペテロとは、どちらもそれぞれ自分なりの方法で、キリストを否認した。しかしユダはその裏切りが最後的なものであったので、滅ぼされたが、ペテロは悔い改めて、解答を見いだすまで、なんとかまごつきながらも進んでいった。

　わたしたちはまた、聖書が教会の書であり、聖書の中の男女の人たちが、あらゆる面でわたしたちとよく似ていて、教会の交わりの中にあってイエス・キリストの忠実なしもべとなり、それを全うするための力を見いだしていることを知る。彼らは神の恵みによって新しい人となり、造り変えられ、上から生まれ変った。失われた者は見いだされ、孤独の者は交わりを回復し、罪人は贖われた。彼らは、自分たちがどのようにみにくい者であっても神は愛したもうたし、神が愛したもうたので救われることができたことを知った。

　わたしたちは、ともに主をあがめることによって、キリスト教の信仰を学ぶ。そして生長するにつれ、質問をし、与えられた回答を疑い、その回答を神が実現して下さるように努力する。わたしたちは聖書を読んでみて、わたしたちは自分で自分を救うことができず、この世の中の他のすべての罪人とすこしも変わらないものであることを知る。わたしたちは社会の交わりの中に、神がわたしたちを強め、みこころを行う力を与えたもう恩恵の通路を見いだす。これがキリスト教教育であって、薫育と指導のまじったものであり、キリストにある神の実在を悟り、聖霊の力によって、キリストを主とし、救い主として受け入れるよう導くものである。

五　教育の限界

第一コリント三・六―九
エペソ　二・八

　教育には一定の限界がある。それが、事実とその解釈に重点が置かれる知識を授けるものと考えられるなら、知識を得ること以上に出るかもしれない。しかしそれでも、おそらくこの世の生活の水準の範囲に留まるのである。

　教育を薫育という言葉で考えても、なおそこには限度がある。キリスト教教育は、神が歴史の中で罪を贖い、支えたもう愛の物語を話すことができ、罪のゆるしと和解の約束をすることができ、ゆたかな生活の保証を与えることができ、生命と生命の希望を示すことができ、神の恩恵が働いている者の交わりを提供することができる。しかしパウロがしているように「わたしは植え、アポロは水をそそいだ。しかし成長させて下さるのは神である」(第一コリント三・六)。

　わたしたちは、クリスチャンの生活の中心にある、めぐみと信仰(エペソ二・八)の関係に帰えろう。わたしたちは生徒を共同体の中に導くことができ、共同体の中で決心の機会を与えることができる。しかし彼らを信仰に踏みきらせるものは、神の恩恵によるのみである。彼らがこの決意をする時には、わたしたちはそのかたわらにあり、すでに行っている信仰のわざによって彼らを支えているのであることを知っている。

　教会は神の国をもたらすものではない。教会は、神がもたらし、またもたらそうとしておられるみ国のために存在している。教会の中で、日曜教会学校は、キリストの大きなからだの一細胞であって、若芽のようなものである。わたしたちのあざけりですぐに倒れてしまいそうな小さな者たちに、第一義的な関心を持っている。これらの小さい者たちは本来子供たちであるが、その中には、信仰の弱い者たちも含まれている。多くの教区内にある日曜教会学校は、キリスト教教育が現在行われているプログラムが、更に進んだ知識に関心を持つ、進んだ信仰を持つ人々に、彼らがその決意を更に深く理解して、自分たちの住んでいる世界にあって、クリスチャンとしてその行動をより効果的にすることができる

々の集りである。彼らは、その生活が真にクリスチャンのものである限りにおいて、会衆の生命を反映させる準備がある。彼らは期待するであろうが、期待すべきものを知らない。教師は彼らが、個人的な出合いを最初にする団体となることを望んでいる。

教師は自らこれを実現することは出来ないが、道を開くことはできる。

一、クリスチャンの団生体活は、各人がそのいる所から始まる。そこには希望と恐れ、期待と不安、幻想と信仰があって、それらは区別され、評価される必要があるものである。

二、この団体生活は、神とともに始まる。これは貨幣の裏側にあたり、理解するのは容易でない。指導者は自らこのことを悟る必要がある。なぜなら彼が自分のクラスを、クリスチャンの共同体を形成する個人的な相互関係に導くことができるのは、それだけだからである。

三、生ける主は、出合いの相手になられる。そうすると普通では起らないようなことが起る。なぜならキリストにおける神は、わたしたちの傷をひろげたり包んだりし、交わり支える力を与えたりするような、不思議な方法で働きたもうからである。

四、聖霊は、神の啓示をともに受けられるような一つの団体のようなものを作ってできる。わたしたちは和解することを学び、和解者になることを学ぶ。こうしたことが必ず起るという保証はない。しかしわたしたちはクラスが一つの団体になるための助けを求めなければ、大切なことは何も起らないということを知っている。

四　教育の目的

マルコ一二・一三―四四

洞察力と信仰を養うことが、キリスト教教育の本来の目標であるが、わたくしたちは教える必要性を見失ってはならない。一般の学校では、宗教についての知識を与えるが、教会は洞察力や神の委託についてもっと多く強調する自由がある。しかし教会にはいつでも教える責任がある。そこで教会のあらゆる組織、特に教会学校や教育の目的のためにできている教会内の小さな組織を通して行われている教会の教育計画には、討論したい評価したりする機会と共に、資料を分配することも含めるべきである。

恐らく教会ほど、魅力的な教材を、特におとなのために豊富に作るところは、他の分野にはないことであろう。その多くはすぐれていて、興味深く、適切なものである。しかしそれが読まれていないことが、あまりに多い。子供もおとなも、読む機会だけでなく、こうした教材を用いてみようという刺激が必要である。これは、教会が聖霊の共同体であり、そこでは教材の内容が共同体の生活に適切なものと考えられる時に、教会の中でひろがりうるものである。わたしたちが生徒の成長しつつある知識、興味、関心、等の先端から始める時にのも、わたしたちの教育を効果的にすることができる。

聖書は、正しい質問をすることができるようになった時、教育に最も効果的に用いることができる。わたしたちは、聖書の中に描かれている人物の多くが、わたしたちと同じような人間であることを発見する。わたしたちは、モーセの殺意を持った怒りにも、律法による奉仕にも、同じように共感できる。わたしたちは、ダビデと同じような不倫な考えを持っているし、またダビデの忍耐と勇気のようなものも持っている。わたしたちは、エレミヤやアモスの義憤に燃え上るが、彼らが非難した空虚な儀礼に満足している。わたしたちは、しばしばパリサイ人のようになりながら、イエスが両替人たちを宮から追い出したことを喜ぶ。

わたしたちはまた、こうした人々が主に会うまで世話をする基本的な要求を持っていな

日本における児童の発達

――キリスト教教育との関連において――

津　守　　真

私はこの問題を二つの角度から考えてみようと思う。第一は日本の社会変化とともに児童の発達は変化するかということの心理学的観点よりの検討、第二は日本の社会情勢に伴なうキリスト教育の課題に関する考察である。

一、社会変化とともに児童の発達は変化するか。

(1) 社会変化とともに児童の生活のあるものは変化する。児童の生活の重要な部分を占める遊びについてみると、三〇年前の児童の遊びと現代の児童の遊びとは異なる。第一には現代の児童の遊びの中では、テレビをみる時間が多い。三〇年前にはラヂオをきくこともそれほど多くなかった。児童にとっては聴く視るという受身の活動が多くなったことになる。第二にはクラブ活動のような集団活動の時間が多くなった。学校の課外活動、近隣の仲間の活動などが多くなり、個人が家庭で過す時間が少なくなった。第三には児童が机の前で本を読む時間が少なくなった。第四には学習塾やけいこごとで過す時間が多くなった。このことは現代社会の両親は、児童を安定したコースにのせたいという動機を強くもっていることと関連がある。

このように児童の生活形態のあるものは変化し、児童が家庭外で過す生活が多くなり、社会が家庭生活の中にまで入りこんできた。そして家族がともに顔をあわせて語り会う時間が減少の傾向にある。

(2) 現代の児童の発達は促進化の傾向にある。最近十数年における児童の体重、身長等の身体発達の向とは著しいものがある。思春期の到来も早期化しつつある。精神発達も以前に比して早くなっており、知的発達なども早くなっているようである。ただし身体発達に比して精神発達は幼稚であつて、そのくいちがいが大きくなっていることも注目せねばならない。みかけはおとなのようにみえても、精神的成熟には達していない。

(3) 社会は変化しても、児童の生活の中には変化しない部分があることをも認めたければならない。たとえば子どもの遊びの中には、石けり、なわとび、まりつき、鬼ごっこなどのように、おそらく数百年昔から連綿として保たれているものがある。児童の発達しつつある心身に挑み訴える刺激は、環境差の如何にかかわらず共通のものがある。発達しつつある運動力を満足させること、発達しつつある想像力や思考力を満足させること、友人と遊ぶ刺激となるものなど、児童の能力の発達を促がす刺激はおそらくどこの国のいつの時代にも共通のものがあるのであろう。

(4) 児童は現代の価値を身につけてゆくの

ようにさせる場所でもある。こうした教育が出来なければ、教会は小さい子供たちだけでなく、すべての人々をも妨害していることになる。

討議の問題

一、あなたの経験では、今日の教会がイエスが子供たちについて言われたことを、まじめに十分取りあげていないというのは、事実であろうか。

二、わたしたちの文明は、子供たちを取り扱う方法によって判断すべきものであろうか。

三、あなたは、日曜学校と教会との間の関係を、どのように考えるか。

四、教師たちが、十分にそのつとめを果すためには、教師の補充と養成のためにどのような改善が必要か。

五、二人か三人が真に一つである所は、彼らが主のみ名によって一つである所である」（マルチン・ブーバー）。これは、人格的な出合いの意味について、何を言っているのであろうか。

六、教育の限界という意味で、指導と薫育との間を区別することは、どのような助けになるであろうか。

筆者紹介

ランドルフ・クラップ・ミラーは、アメリカ聖公会のカリフォルニヤ州アルバニーの聖オーバン教会の監督代理であり、一九五〇年頃、聖公会カリフォルニヤ監督区のキリスト教教育部長であり Church Diuinity Sahool of the Pacific の宗教哲学およびキリスト教教育の教授でもあった。一九四七年以来、プロテスタント・エピスコパル教会の新しいカリキュラム「シーベリー・シリーズ」の編集局のメンバーとしても活躍していた。一九五二年以来、エール大学神学校でキリスト教教育の教授として今日におよんでいる。

ミラーは一九四一年にシエルトン・スミスが、その著書 Faith and Nurture を通して近代キリスト教教育の弱点をつき、これをするどく批判したのに刺激されて一九五〇年に The Clue to Christean Education を発表したが、（この抄訳は本誌一九五九年九月号かり一年間にわたって連載し好評をうけた）「児童がキリスト教的は発達してゆくためには、キリスト教の基本信条を根底としたカリキュラムによる教育を必要とする。」と述べ、さらに相つぐ著書を通して「生活中心主義の教育は、心理学的にも、教育学的にも、哲学的にも健全である。それは自然の、そして最も速い学習方法である。けれども、そこには二つの誤りが教育者たちによってたびたびなされたのである。その第一は、方法を重視する結果、方法がそのまま目的になってしまって、そのために行為と信条の方向がボヤけてしまったり、見失なわれてしまったことである。その第二は、教育内容がリベラルな教義の所在であったため、民衆の大多数が教えられることを望んだものとかけはなれていて、一致しないということが明らかになった」と、そしてさらに、

「キリスト教教育のための神学が必要である。キリスト教教育の目標、理論および方法は、もっと自覚した神学的再建設によって、下から帯をしめられる必要があり、それもまたおそらく、それによって変化を加えられる必要がある。……同時に、全組織の中において、内容を方法に関係づける問題に直面しなければならない」と主張して、キリスト教の神学を忠実に解明し、教義と日常経験、教育の内容と方法、教育と日常生活などの間の関係をもっと深め、神学がただ神学のための神学であってはならないし、教会学校の教育はそのまま、彼らの日常生活につながるものでなくてはならない、そのためには、われわれの信仰・信条が何を意味するか、児童生徒が限られた経験と能力によって解明できるように「飜訳」してやらなければならないと強調していることは見落せない。

(1)　聖書は安定した価値規準を与え、社会の価値の動揺に処する道を知らせる。社会の動揺する価値は相対的なものであることを知るときに、動揺する価値によって混乱し困惑することはない。たとえば船にのって、窓からみえる水平線が動くのをみるとき私どもは不安定を感ずる。それは実は水平線が動いているのではなくて船の窓枠の方が動いているのである。また船がゆれると私どもの体の安定を失ってくる。このように水平線に窓枠と重心方向と三つの規準がくい違って、どれを頼りにしてよいかわからないとき、精神状態はきわめて不安定である。この三つの規準がいづれもくい違うことを自覚し、船の窓枠にすがりつこうとする努力をしなくなり、その相対性を知るときに安定は回復する。聖書はいつの時代にも通用する規準を与えるので、社会の価値の相対性を知らしめ、社会変化にも動揺しない心を与えてくれる。

(2)　児童に社会変化によって変らぬ自分自身を与えること。

児童が希望し、愛するものが変化しないことは重要である。絶望に終ることのない希望、裏切られる…ことのない愛を聖書の中に発見することを知らせることは、社会変化によって変らない自分自身を与えることになる。しかし、このようなことを児童に知らせるのは抽象的レベルでは困難である。おとなが児童を交えて信仰の交りをもつことが重要である。ことに社会が組織化して非個人化してゆくほど、個人的交りをもちたいという人間の欲求は増大するであろう。顔と顔を相見合わせることのできる小集団は個人にとって大きな影響をもつ、児童を交えて信仰を中心とする交りをもつときに、児童はそこに所属感をもち、その交りを愛してゆくことができるであろう。そのとき信仰は生活に根ざしたものとなってゆくであろう。

(3)　現代は世界各地のさまざまな考えをもつ人々が互に交流し接触することが多く、複雑な人間関係、社会関係をつくりやすい。そのような複雑な社会関係に動かされずに、等しい価値をもつ人間として交るためにはキリスト教の人間観による教育を必要とする。

児童はその属する集団の社会評価にしたがって、その枠の中で他人をみるようになる。固定した身分関係の封建社会においてはその社会の評価にしたがって、他の階級を見下しあるいは見上る。それは相手の人間の実質によらず、その社会のもつカテゴリーによるのである。しかしキリスト教人間観はそれと反する。

社会変化は異人種をも互いに近づけ会っている。そこではその国における人種評価にしたがって、他人種を見下しあるいは見上げる。劣等視と優越感とがそこに流れる。それと他人種との接触による実質的判断ではなくて、カテゴリー判断である。これもキリスト教人間観と反する。そしてこのような偏狭な人間観がグループ間闘争の一つの根源である。ここにも社会変化におけるキリスト教教育の重要な課題がある。

(4)　現代の社会機構において、おとなが児童に対して抱く期待は、その社会機構にはまりこむことでありその社会機構の落伍者になりたいことである。だから、大学を出て大企業や大組織の一員になることが中産階級の親の期待となり、ひいては大学や高校の入試の激烈化、そのための受験準備の激しさ、小学校のころより学習塾の繁昌というような現象となってあらわれる。そのことは小学校高学年以上の教会学校の出席率とも関係するであろう。

このような事態にあって、児童自身に聖書による人生の意義を知らせ、また親に対して聖書による教育観を知らせることは重要である。

また教師自身、このような現代社会機構の中に生きる人間である。教師自身が社会機構の中に埋没して不必要なほどに社会の側にくみして社会生活を附属品的にしてゆくなら

で、急激な社会変化の時代には世代間の価値の葛藤は大きくなる。児童ははじめは親を通して、次には教師、友人、文化財を通して、その社会のもつ価値を身につけてゆく。わが国における最近二、三〇年の価値の変化はきわめて著しい。戦前の価値を封建的、権威的、国家主義的とすると、戦後の価値は民主的、社会主義的、合理主義的である。したがって戦前に成長期を過したものは概して保守的であり、戦後に成長期を過したものは民主的である。そして敗戦の前後の価値の転換期に成長期を過したものはすべての価値規準に懐疑的、虚無的になる傾向がある。このような世代間の価値のくいちがいは、児童とおとなとの間の理解に溝をつくる。

(5) 社会と家庭との葛藤

社会の著しい変化に比して、家庭の内部の変化は少ない。社会は進歩的であり、家庭は保守的である。社会では進歩思想をもっている人でも、家庭に帰ると暴君で専制的である人は少なくない。児童は学校や友人の間では新らしい社会の価値と経験するが、家に帰ると両親の保守的な考えにぶつかり、社会の価値と家庭の価値との間に葛藤と感ずる。

(6) 社会変化は自分自身のよりどころを失わせる。

人は自分自身がなれ親しんだ領域や、自分が所属感をもつ場所に親近性を感じ、そこに自分自身を感ずる。ところが社会変化はそのような領域を変化させる。現代の職場転換の問題にみるように、新らしい技術が発達すると、古いやり方では通用しなくなって新らしい方法をとりいれなければならなかったり、あるいは古い職場はもはや不要になって新らしい職場に転換せねばならなかったりする。それは人が今までそれによって生きていた仕事を失わせ、愛していた領域をとりさるということを意味する。そのときに人は自分が何であるかを見失い、自分が何を希望し何を愛してよいのか分らなくなる。そこに虚無と絶望と罪悪感とが生れる。それは急激に、社会変化に伴っておとなのぶつかる問題であって、精神衛生的にも考慮せねばならない事態である。

しかし、実はこの点は児童にとっては大きな問題とはならない。児童は変化に対して適応する力をもっている。そしておとなにとってはとうてい適応し難いような変化した社会の中に生れ、適応して育ってゆくのである。児童はすでに変化した社会の中に生れているので、それは変化としてではなく当然のものとしてうけとっている。

むしろ児童の生活にとって、自分自身を失わせるほどの大きな変化は、家庭生活の変化である。すなわち、親を失うこと、愛する人を失うことは、生活のよりどころを失わせ、大きな打撃を与える。

(7) 社会変化と児童の発達に関する要約

児童は家庭や学校によって保護された世界の中にいる。そして社会の変化は、家庭、学校というクッションを通して児童に伝えられる。だから家庭や学校にまで変化を与えるものは児童にとっても影響力をもっている。現代の社会変化の時代は、両親の自信喪失、教師の虚無感によって特長づけられる時代であり、そのことが児童に対して及ぼす影響は大きいであろう。

他方、児童自身は環境に対する適応性をもっており、おとなにとっては適応しがたいような社会変化の中に生れ、それに適応して生きている。そしてすでに変化した社会の価値を身につけているので世代間の葛藤を招くのである。

そしてまた、現代は児童の発達を促進化の方向にあるが、児童の心理的メカニズムは変化しないものも多いことを認めなければならないだろう。

二、社会情勢に伴うキリスト教教育の課題

児童説教

十月のこよみ



今月も九月につづいて、三位一体後の期節であるが、記念日としては、次のような日が定められている。

福音書記聖ルカの日――これは十月一八日である。ルカは医者であったが、福音書を書いたことによって、魂の医者になった。また彼はすぐれた文筆家であり、パウロのよい協力者であった。

使徒聖シモンと聖ユダの日――これは十月二八日である。シモンもユダも、キリストの使徒として聖書に名前はでているが、あまり目だった人物ではなかったようである。しかしユダは伝説によると、たいへん広く伝道して歩いた人のようで、船がユダのシンボルとされている程である。

宗教改革記念日――これは十月三一日でルターが九五カ条をヴィッテンベルクの城教会の門扉に掲げた日である。これを記念日として守るようになったのは、一六六七年に、ザクソニーの選帝候の指示によるものであったから、随分古いことである。今日ではほとんど全世界のプロテスタント教会で守られているが、ルーテル派の教会等ではその前の日曜日を宗教改革日として記念の礼拝を守っている。またこの日を欧米では十一月一日の諸聖徒の日の前夜祭であるハロウィーンデーとして楽しむ習慣がある。

十月一日

主こそわが神

聖書　心をつくし、精神をつくし、思いをつくして、主なるあなたの神を愛せよ

主イエスの御生涯の最後の週は、劇的なエルサレム入城に始まりました。ホサナ、ホサナと歓呼熱狂した民衆は主を迎えたが、主はかえって心を傷め、彼らのつれない心と近づく十字架の使命を感ぜられたでしょう。そこには静かな神の都はなく、暴動の恐怖と不安が誰れもの心を襲いました。都での主の言動は宗教家らの憤りをかい以前からいだいていた彼らの反感は絶頂に達しました。「そのときパリサイ人たちがきて、どうかして、イエスを言葉のわなにかけようと相談した」とあります。そこで彼らは入れ代り立ち代り、主に難問を持ちかけて、主を窮地に落とそうとしたが、そのつど、主の知慧はそれらをみごと解決して彼らを唖然たらしめました。

まずパリサイ人はヘロデ党と同盟して納税問答をかかげて迫ったが、「カイザルのものはカイザルに、神のものは神に」との巧妙な答えで共に沈黙して去っていった。共同の働きにも、党派の利己心は働くもので、パリサイ人の失敗を喜んだサドカイ人は、復活問答をかざしてつめよった。主は「あなたがたは聖書も神の力も知らないから、思い違いをしている」と指摘された。次いでパリサイ人の集いの中から一人律法学者が立って「律法のうちでどのいましめが第一か」と質問した。主は「心をつくし、精神をつくし、思いをつく

ば、教会はこの世にのまれてゆくであろう。いそがしいといって、教会生活をおろそかにしない生活をもつことはキリスト教教育の前進にとって必要なことである。

(5) 社会は変化しても、われらの罪のために十字架につき給うたイエスに感動する心は、人間の中にいつまでも存在するであろう。社会変化とともに罪意識は変化するかという質問が出されるならば、変化すると考えなければならない。それは、罪意識は親の与える規準と大きな関係があり、親の規準が社会変化とともに変化するならば、何を罪と感ずるかということも変化するからである。また、自分自身が何であるかを見失い、自分の生活の目標を失うときには罪意識を伴うものである。それは前に述べたように社会変化と関係がある。だから、罪意識やそのあらわれ方は社会変化によって影響されるといわなければならない。

しかし、神の意志に反することが罪であることを知るときに、人間には新たな水準の罪意識が生ずる。そして、この水準の罪意識はおそらく不変のものであろう。そして人が己の罪のために代って十字架にかかったということに対して感動する心もまた人間にとって不変のものであろうと思う。

（お茶の水大学助教授）

日本のカリキュラムが参考？

華僑教会のキリスト教教育

東南アジア地区における華僑教会では、キリスト教教育とそのカリキュラムへの関心が高まっているが、華僑の教会といっても、それは各種の教派に分れて属しているので彼らたちは何とかして共同のカリキュラムを持つことが、教会教育のために必要であるということを、かねがね考慮していたようである。それが、この程、ようやくにして、すべての華僑教会が用いられるようなカリキュラムを完成した。しかしカリキュラムの目的の決定については、未だ最終的な文章として発表されていないが要点はつぎのようなものである。

「イエス・キリストの御命令における神の御意により、聖霊を通して、各年令層の人々が現在の環境の中で、イエス・キリストにおいて啓示され、聖書の教えを通し、教会の交りを通して、私共に示されている神の贖罪愛を理解し、さらにこれを受け、経験するように助け、彼らの神を信ずる信仰を打ちたて、今日の世界において神に仕えるキリスト者としての責任を完うするよう力づけることを目的とする。」

これらが出来上る基本問題として、四つの事項によって協議されたようで、それはなかなか核心をついている。

1、なぜ、我々は日曜学校のプログラムをつづけているか？

2、この学課は、誰れを教えるためであるのか？それらの人々の現状は？

3、彼らのニードについて、人間としての共通のものと、東南アジアという困難な情勢下にある中国人としてのニードについて。

4、彼らのニードに応えるために、我らが提供せんとする福音は何であり、福音が、彼らに語ろうとしているものは何か？

このような基本問題により練られたカリキュラムは、日本で三年前に完成し、現在各教派の各国教会で使われているところの綜合制を採用しており、三年を一サイクルとして、それぞれ各年令層に適応した教材としている。

の中風の人もイエスさまのおかげで、すっかり元気になり、病気も何もフッとんでしまいました。

イエスさまは今でも私たちに「あなたの罪はゆるされたのだよ、しっかりしなさい」とやさしいことばで励ましていて下さるのです。だから私たちも本当にイエスさまを信じて、我ままな自分をすてて生れ変った新しい人、神さまと人々のために心から働ける人になりましょう。

高木　彰

——十月一五日——

厚い壁をこわして

聖書　招かれる者は多いが、選ばれる者は少ない

マタイ二二・一―一四

ケニヤの動物の国に御招待とか、ディズニーランドに御招待、パリーへ、ニューヨークへ！そのような懸賞広告が眼につきます。そのどれも見物するには楽しい面白い所でしょうが、何十万、何百万に一人というわけですから、あまり胸をふくらませもできません。

ところが今日のイエス様の譬話では、誰一人もれることなしに、神様がわたしたちを招かれていることを、一人の王様が用意して、みんなに招待状を出したことにたとえています。

もちろん、人々は大喜びで出かけたことでしょうか。

いいえ、そうではなく、この記事は、みなその招きを聞き流していつものように畠や商売に出かけたり、更にひどいことにはその使いを殺してしまったとさえ言っています。

無理な注文や、ひどい命令だったらともかくも、これは一体どういうことを教えているのでしょうか。

それは、わたしたちがせっかくの神様の招きから離れてゆくのはだれが見ても「悪い」と言われるようなドギツイことでなく、それ自体は害のない、ある意味で必要なことがらが、却って厚い壁となって、神様を見のがしてしまう―手紙を書いたり売ったり買ったり人に会ったり、遊んだり、と、一日一日を何となく時間にまかせて過しているだけでは、せっかくの神様の招きに与り損うぞ―とイエス様は警告されておられるのです。

神様は日常生活の奥の奥底から、わたしたちを新しい人間にしようとされているのに、わたしたち自身はその日常生活を以て、その招きに気づかないばかりか、「王の使いを殺した」ように、耳を自分からふさいで招きの声を黙殺してしまう。そのわたしたちはますます壁の厚い、古い人間のままで終ってしまうことでしょう。

終りの所に、「礼服」をつけない招待客がはげしく叱られたとありますがこの男も神様の招きを軽く考えていた一人といえましょう。それはちょうど、自分の汚れた姿を悔い改めることなく、「多分神様は、自分のいいかげんさにも、眼をつぶって見のがして下さるだろう」と、甘く考えがちなわたしたちの姿に似ています。

「世界の最も深い奥義は、我々を待っておられる神のおられることだ」とルーテルは申しましたが、神様の招きを拒む、様々の厚い壁をこわしつつ、戦いつつ、その招きに与りたいと思います。

宝珠山幸郎

して主なるあなたの神を愛せよ」これが第一で第二もこれと同様「自分を愛するようにあなたの隣人を愛せよ」と言われた。論争は、すへて彼らの失敗に帰したが、主の御心には明かに近づく十字架が見えて来た。決死の主は、「あなた方はキリストをどう思うか、だれの子なのか」と質問を発せられた。パリサイ人やサドカイ人らが種々の問いをもって主を窮地に陥れようとしたが、主はそれらを苦もなく解かれたばかりでなく、ここにメシアの系図問題をつきつけて、却って彼らを窮地に陥れてしまわれた。「イエスにひと言でも答えうる者はなかったし、その日からもはや、進んでイエスに質問する者もいなくなった」悲壮な勝利は主に帰し、そして同時に死の予感も。

主が律法学者に答えられた御言は私共の義務を要約したもので、「神を愛すること、人を愛すること」であります。更に主イエスを神の子と信じてこそ、この二つの律法を全うすることが出来るのです。

故に我らは「世と肉と悪魔とのいざないを防ぐ恵みを与え、清き心をいだきて、唯一の神に従うことを得させ給え」と祈りましょう。

柴田　赳二

十月八日

あなたの罪はゆるされた

聖書　イエスは彼らの信仰を見て、中風の者に「子よ、しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだ」と言われた。

マタイ九ノ一―八（参考エペソ四ノ二二―二八）

あちらこちらと伝道の旅をして帰られたイエスさまは、やっと自分の町（カペナウム）に帰って来られました。そこではイエスさまのお帰りを一しょうけんめい待ちかまえている人たちがありました。それは中風と言う体のきかなくなる大変な病人と、そのお友だちでした。この人たちはこの可哀そうな病人をイエスさまになおして頂きたいと思い、病人自身もこんな病気から早くよくなりたいと言う願いをもって、一日中イエスさまの帰りを待っていたのです。

イエスさまはその信仰をごらんになって、こうおっしゃいました。「子よ、（さあ）しっかりしなさい。あなたの罪はゆるされたのだよ」と。どうでしょう、イエスさまは不思議なことに「あなたの病気はよくなったのだ」と言わないで「あなたの罪はゆるされた」とおっしゃったのです。ところが「罪はゆるされたのだよ」と言われた中風の人は、イエスさまのこのやさしい御ことばで、今までの暗い悲しい心に光がさしたように生れかわって、別の人のように元気で働けるようになりました。それはイエスさまを心から信じて、自分の罪を悔改めたからです。

パウロ先生と言うえらい先生は聖書の中に、イエスさまを信じることを「新しい人」を着ることだと言っています。面白い言い方ですね。皆さん、古くてよごれた服をぬいで、パリパリの新しい服を着た時どんな気持がしますか。何だか体の中まで新しくなったようなシャンとした気持になるでしょう。イエスさまを本当に信じたら、心の奥の奥まで清くされ、古い服のような古い悪い自分が生れ変って新しい服を着たように新しい人になるのです。そしてイエスさまがなさったように、神さまを愛し、人々を愛することの出来る人になるのです。イエスさまを信じなかった以前の古い自分がスッカリ、生れ変ってしまうのです。何とすばらしいことでしょう。あ

まっ白なラインが運動場に八本ひかれました。百メートル競争がはじまるのです。ひとりひとり、自分のコースを走らねばなりません。となりのコースに足を入れた人はたとえ一位になってもダメになるのです。失格です。

ピストルが鳴って、七人の男の子はいっせいに走りだしました。一線上に並びましたが、恵一くんがグングンでました。二位は洋介くんです。洋介くんも負けてはいません。だんだん差がちぢまりました。恵一くんがんばれ。このとき恵一くんははげしくころびました。ころびながら恵一くんは洋介くんが自分のコースに足をいれていたのをはっきり見ました。しかしその次には、恵一くんは目の前がまっ暗になり、ぼーっとなったアタマの中で、自分の横を駆けぬけていく五人の足音を聞いただけでした。

もちろん洋介くんが一位でした。だれも洋介くんが失格だとは知らなかったのです。恵一くんは痛い体をさすりながら洋介くんを見つめていました。

その次にまた別の七人がスタート・ラインにならびました。こんどは女子です。はげしいせりあいの競争でした。一位は道代さん。ところがそのとき、洋介くんは受持の先生のところに走っていきました。

「先生、道代さんは失格です。となりのコースに入ったもの」

洋介くんはこう言ってとくいそうな顔をしていたのです。恵一くんは、こんな洋介くんをゆるしておけないと思いました。そして、先生のところに走っていきました。

自分の悪いことをゆるされていることには気がつかず、他人のあらさがしばかりしている人間を神さまはいちばんおきらいになります。一万タラント（約三百億円）の借金をゆるされて死なずにすんだ人が、百デナリ（約五万円）を返さない人の首をしめて牢屋に入れたというイエスさまのお話は、洋介くんのような人はきらいだと神さまがおっしゃっていることを教えておられるのです。神さまに好かれる子供になるためにはどうすればいいのか、考えましょう。

註 一タラントは六千デナリ、一デナリ五〇〇円と計算すると、一万タラントは三百億円になる

小野　一郎

1962年の教会暦

アドヴェントより始まる教会暦の表を本年も発行いたします。礼拝には絶対に欠くの事出来ない教会暦を、教会、教会学校ばかりでなく、クリスチャン・ホームならぜひおそなえください。

十月二二日

イエスさまのお言葉を信ずる

聖書　彼は自分に言われたイエスの言葉を信じて帰って行った。

ヨハネ四・四六—五四

「ショウコをみせろ」。こんな風に友だちから言われたことはありませんか。あなたが教会学校に来ている。神さまを信じている。イエスさまを信じている。そのことを知った友だちが「どんなショウコがあるのか」ときくことがあります。

「このことは本当だっていうショウコがあるのかなあ。なにかショウコがあれば信ずるのになあ。あなたはこんな疑問を持ったことはありませんか。多くの人は同じような考えを持ちます。イエスさまのところに集った人たちもやはりそうでした。イエスさまは「あなたがたはショウコを見ない限り、わたしの言葉を信じないだろう」とおっしゃったのです。多くの人はショウコがなければ信じられないと考えています。しかし本当でしょうか。

わたしが六年生のとき、ひる休みに友だちが出来たてのパンを持って教室にかけ込んで来ました。「今、かどのパン屋に行くと焼きたてのパンをタダでくれるぞ」。でもわたしは本当にしませんでした。そんなことなどある筈はなかったからです。ところがそれをきいてすぐ行ったのでしょう。二、三人の友だちが手に手にパンを持って帰って来ました。「本当だった、本当にくれたぞ」。わたしは大あわてでかどのパン屋までかけつけましたが、おじさんは困ったようすで笑いながら、「さっきはかまどをあけたばかりだったからあげたんだよ」というだけでした。

「パンをくれる」というはなんのショウコもないことです。ふるほど手にパンを持っていても、うそを言っているかも知れないのですから。しかし本当だと思って行った人は、パンをもらいました。信じなかった人はなにももらうことが出来なかったのです。つまりショウコがあるから信じたのではなく、信じたら自分もそのショウコにあるものをうけることが出来るのです。

もちろんイエスさまが約束されるものは、パンなどとはくらべものになりません。しかし本当の信仰はショウコがあるから信ずるのではなく、そのお言葉だけを信ずるのです。そうすると、はじめてわたしの信じたことが間違いでなかったことを知らされます。このお話の中のお父さんはただイエスさまのお言葉をいただいただけでした。彼はそのイエスの言葉を信じて帰ったのです。このようにイエスさまのお言葉を信ずるひとはさいわいです。その人こそ、信じたことがほんとうだということがはじめてわかるからです。

山下　万里

十月二九日

神さまに好かれる人

聖句　あなたがためいめいも、もし心から兄弟をゆるさないならば、わたしの天の父もまたあなたがたに対して、そのようになさるであろう。

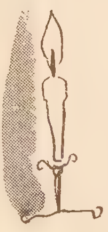
マタイ一八

れるであろう。
　愛は神より出でたるもの（ヨハネ第一書三・七）であり、愛は神の本質である（ヨハネ第一書三・六）
　われわれの愛は、この神の愛への応答として発露するときにのみそれは真実の愛である。
　主イエスは「第二もこれと同様である『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』」と言われた。
　ここでわれわれは「第二もこれと同様である」と言われた主イエスのお言葉に注意しなければならない。
「同様」と訳してある（ホモイオス）と言う原語は同質と言う意味もあり、音楽用語の（シミラー）即ち「平行して進行する」と訳されていることばの原語でもある。
　そこで、主イエスの言われた意味は、全身全霊をつくして神を愛することと隣り人を愛することとは同質のことがらであり、むしろ両者は平行して行わるべき性質のものであると云う意味である。
　ヨハネの第一の手紙四の一九――二一に記されているように、神を愛していると言いながら、兄弟を憎む者は偽り者であり、見ゆる兄弟を愛していない者は、神をも愛していない者と認めざるを得ないのである。
　そこで次に問題になることは、両者が同質だとすれば、隣人愛だけでよいではないか、隣人を愛することは、神を愛することになるのではあるまいか、と言うことである。
　ところがここにもう一つ重要な点がある。主イエスが全身全霊をつくして神を愛することが第一であると仰せられたことを見逃してはならないのである。
　この神への愛を抜きにして、自分を愛するように隣り人を愛すると言うことは果して真に隣り人を愛することになるであろうか。そもそも人間が自分を愛する愛し方と云うものは随分いかがわしいものではないだろうか。「あの人は一体自分を愛しているのだろうか」と疑問を抱かせられる場合も少くない。いわゆる自暴自棄に陥っている人達の如きは、その最も甚だしき者である。……だとすると、そのような、いかがわしい愛をもって隣り人を愛することは果して真にその人を愛することになるであろうか。
　ここで初めて主イエスが第一であると言われた、全身全霊をつくして神を愛する愛が根本であり、この愛が隣り人に及ぶものでなければならないことが分かるのである。
　われわれの隣り人、それは一人残らず神の限りなき御慈愛の対象であり、それらの一人一人のために主は十字架の御苦難を甘受されたのである。
　民主主義の根本である人権尊重の精神も、実はここに源を発しているのである。

三位一体後第一九主日

霊の生命について

十月八日

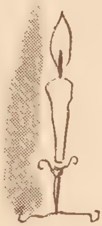


主日の趣旨　キリスト者とはキリストに在りて新たにされたもののことである。人間は恩寵溢るる神の家を離れ、誤れる自由を憧れて遠国に旅立ち、ほしいままなる生活に身を委ね、滅亡への道をさまよいつつあるのである。われらが永遠の滅亡をまぬかるる道は唯一

礼拝説教



三位一体後第十八主日
キリストとの一致



十月一日

主日の趣旨　キリストにおいて神のことばを示され、キリストにおいて神との交りに入れられた我らは、この恵みに応えて、清純な信仰をもって唯一の神に従わねばならない。されば神に従う道は如何。福音書は教法学者への主イエスのお答えを引照してこの道について教えている。

主題　**神に従う道**

福音書　マタイ　二二・三四―四六
使徒書　Iコリ　一・四―八
旧　約　ゼパニヤ　三・一二―一七

祈り　神よ、願わくは御民に世と肉と悪魔との、いざないを防ぐ恵みを与え、清き心をいだきて、唯一の神に従うことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説教

復活を否定するサドカイ人たちが主イエスの復活論をくつがえそうとして巧みな質問をしかけて来たが、却て主イエスに言い伏せられてしまった。

主イエスを排撃しようとする点においては共鳴していたパリサイ人が、新手となって主イエスの前に現れたのである。パリサイ人たちのチャンピオンとして主イエスに質問の矢を放ったのは一人の律法学者であった。

「先生、律法の中で、どのいましめがいちばん大切なのですか」

律法学者は言うに及ばず、神に従おうとする者にとっては、これはきき度い質問である。

主イエスのお答えはまことに鮮かであった『心をつくし、精神をつくし、思いをつくして主なるあなたの神を愛せよ』これがいちばん大切な第一のいましめである。第二もこれと同様である『自分を愛するようにあなたの隣り人を愛せよ』これらの二つのいましめに律法全体と預言者とがかかっている』

全身全霊をつくして神を愛することこそが信仰の極致である。

聖パウロも言っている「たといまた、わたしが自分の全財産を人に施しても、また、自分のからだを焼かれるために渡しても、もし愛がなければ一切は無益である」と（Iコリ一三・三）

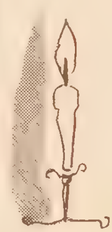
いかに多くの施しが、自己愛に基いて、自己の名誉と名聞のために行われているか、如何にしばしば自己誇示のために犠牲的、英雄的行為が行われたかを知るならば聖パウロのことばの真意が理解さ

主イエスから罪のゆるしを受けた病者が、次に正しく歩ましめられたように、主キリストに在って罪の赦しを得けて初めて我らは正しく歩むことが可能となるのである。

それは、健康が快復して自力で歩むのではない。キリストを着て聖霊によって歩むのである。

三位一体後第二〇主日

反省



一〇月一五日

主日の主旨　前主日は主イエス・キリストによる更新の恩寵について学んだ。本主日は、この更新の恩寵に浴した者は如何に生きるべきであるか、そしてこの更新の恵みへの招きを拒絶した者は、どのような運命を辿るべきかを示されるのである。

主題　**主イエス・キリストを着よ**

福音書　マタイ　二二・一—一一
使徒書　エペソ　五・一五—二一
旧　約　エズラ　一〇・一—一二

祈り　いとあわれみ深き全能の神よ、豊なる恵みを我らに与え、すべて害あるものを防ぎたまえ。また常にからだと魂とに備えをなし、喜びて御心にかのうことを行わしめたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

説教

親にとって最大の歓喜の日は我が子の婚宴の日であろう、もちろん、愛する子をその膝元から手離す淋しさはまぬかれないが、それにまさる大きな満足と喜びがあるに相違ない。

時代は混沌として結婚にも多くの困難があり、又さまざまの問題を含んではいるが、しかし依然として婚宴は人間の地上の生活における最も華かなそして最も美しい場所であり時間であろう。

主イエスは地上に再び降り給う栄光の日を、王が王子のために設けた婚宴にたとえられた。主の再臨日……それはただの喜びが地上に呼応する日であり、復活の主、勝利の王が、正しき審判者として全き支配者として地上に臨み給う日である。

さて、王はその僕たちを遣して、あらかじめこの婚宴に招かれていた人たちを呼ばせたが、その人たちは来ようとはしなかった。ここに言うあらかじめ招かれていた人たちとはイスラエルを指している。そしてこの時遣わされた使者とは旧約の預言者たちであった。預言者たちの招待は結局、キリストへの招待であったが、イスラエルはこの光栄ある招待に応じなかった。

そこで王は第二の使者（新約の使徒たち）を遣したが或者は畑に或者は商売に出てゆき、驚くべき事には、或者たちは僕たちを捕えて侮辱を加えた上、殺してしまった。

旧約の使者（預言者）たちの招きは予備的な招待であったが新約の使者（使徒）たちのそれは婚宴の準備が既に完了したことが加えられている。言うまでもなく主キリストによる贖罪の御業がすでに完了したことを指しているのである。

しかしこの驚くべき破格の招待状を有した使徒たちに対する人々の態度は冷淡であり、無関心であり、拒否であり、迫害であった。

つ古き生活をすてて、キリストによって新たにされるほかはない。
悔改めと信仰とをもって主イエス・キリストに立ち帰る者は主の贖いの恵みと、恩寵の手段として定められた、バプテスマのサクラメントによって新たにせられ永遠の生命にあづからしめられるのである。

本主日は更新の生活について学ぶ。

主題　新しき人

福音書　マタイ　九・一―八
使徒書　エペソ　四・二二―二八
旧　約　アモス　二・九―一六

祈り　神よ、主によらざれば御心にかのうことあたわざるゆえに、聖霊をもって我らの心を治め、常に導きたまわんことを。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る　アーメン

説　教

主イエスにとって第二の故郷とも云うべきカペナウムの町における出来ごとである。

中風のため動けない病人を知人たちが多分担架のようなものに乗せてかついできた模様である。主イエスは病人とその知人たちの主イエスに対する信仰を認めて「子よ、心安かれ、なんじの罪ゆるされたり」と宣言された。

病苦は罪の報いであり刑罰であるとイスラエル人は信じていた。だから病人の苦しみは肉体的な苦痛よりも精神的な苦悩の方が大きかった。そこで、主イエスから赦罪の宣言をきいた途端に病苦から解放される病人も多かったようである。

「子よ、心安かれ、なんじの罪ゆるされたり」……何と云う慈愛にみちた温情あふるるお言葉であろうか。

中風の病者の心の闇に光が投ぜられた、ホノボノとした歓喜が心の一隅から次第に大きく広くひろがって、遂に心のすみずみまで明るくなった。それは正しく更新の奇蹟であった。

今日でもそうであるように中風は難病であり業病であった。快癒する望みは全くなかった。身体は不自由で労働に耐えぬのみか身の廻りのことさえ人の世話にならねばならないのである。その上に耐え難いのは罪の責苦である。

このような絶望の人、悲哀の人、苦悩の人に、希望の光が投ぜられたのである。生ける屍のような古き人を脱ぎすて、心の深みまで新たにされ、神にかたどり造られた新しき人を着る恩寵に浴せしめられたのである（エペソ四・二二、二三）

しかも、更にその上に――「起きよ、床をとりてなんじの家に帰れ」との御言葉がかけられたのである。

とりまきの群衆さえも、恐れおののき、神を讃美した。

私は、この物語を他人ごととは思えないのである。中風の病者の多くが半身又は全身が不随であるように私たちもまた身体不随者であった「己の欲するところの善はこれをなさず、欲せざる所の悪は之を行う。ああ我悩める人なる哉、この死のからだより我を救わん者は誰ぞ」まさしく全身不随者の絶望的な叫びである。

私たちはパウロと共に、この様な悲惨から救い出されたのである。

音書では信仰によって大いなる歓喜に至らしめられた王の近臣の物語を学び、使徒書では信仰の戦いがあって始めて真の平安があることを学ぶ。旧約は信仰に生きる者の歓喜の詩である。

主題　信仰による平安

福音書　ヨハネ　四・四六―五四
使徒書　エペソ　六・一〇―一七
旧　約　ハバクク　三・一八―一九

祈り　あわれみ深き主よ、御民の罪を赦し、これに安きを与え、その不義をことごとく清め、おだやかなる心をもって主に仕えしめたまわんことを、主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。

アーメン

説　教

本日は使徒書を中心にして本主日の教えを学び度い。主イエスはこの世を去られる前に弟子たちに仰せられた「わたしは平安をあなたがたに残して行く。わたしの平安をあなたがたに与える。わたしが与えるのは、世が与えるようなものとは異る」（ヨハネ一四・二七）と。

主がわれらに与え給う平安、世が与えるものと異る平安、それは一体何であろうか。言うまでもなく信仰による平安である。使徒書には、我々が信仰による平安を得るための三つの秘訣を教えている。

㈠主にあって、その偉大な力によって強くなりなさい（六・一〇）

我々は世にあるあいだ、罪と世と悪魔とを相手として戦わなければならい。信仰がどんなに深くなっても悪魔の誘いをまぬかれることは出来ない。主イエスにさえ悪魔の誘いがあったではないか。

このような激しい戦いの中にあって平安を保つためには強くなければならない。しかし悲しい哉、我々にはこのような敵に立ち向うだけの力はない。だから本日の使徒書には「自らの力によって」とは言わず「主にあって、その偉大な力によって強くなりなさい」と教えている。聖パウロは「私を強くして下さるかたによって、何事でもすることができる」（ピリピ四・一三）と言っている。

又コリント人への手紙の中には「わたしが弱い時にこそ、私は強いのである」（Ⅱ一二・一〇）とも言っている。これらのことばの中に聖パウロの偉大さの秘訣がかくされている。

真に自らの弱さを知り、神のみ力に頼る者のみが天来の力によって強められ、この世の悪の力と戦うことが出来るのである。

㈡神の武具で身を固めなさい（六・一一）

われらが悪に立ち向う時に徒手では勝利の見込みは立たない。神から与えられ授けられる武具で身を固めねばならない。

真理の帯、正義の胸当、平和の福音の靴、信仰の盾、救いのかぶと、御霊の剣、これらは何れもこの世がわれらに与える武器ではなく、神から授けられる武器である。

㈢絶えず祈り（六・一八）

どんなに堅固な武器で身を固めても祈らざる者にはそれらの武器は飾りものに過ぎないものとなるであろう。

画竜点睛と言わんか、それらの武器に生命を与えるものは神との不断の交通である「絶えず祈りと願いをし」「どんな時でも御霊によって祈り」「すべての聖徒のために」も「祈りつづけ」なければならないのである。かくてこそ真の平安は我らを訪れるであろう。

今日教会の招きに対する人々の態度も、またこれに似ている「仕事が忙しくて……」と言う人々は、教会を閑人の集る所と考えているのであろうが、信仰とは人間として生きるか死ぬるかの問題である。神に仕えて永遠に生きるか、この世に仕えて滅びるかの問題である。

初代教会の人々が地下の納骨所において、生命がけで礼拝をささげ聖餐式を守ったことをわれわれは忘れてはならない。

ヘブル書の記者は「あなたがたは、罪と取り組んで戦う時、まだ血を流す程の抵抗をしたことがない」（一二・四）と言っている。

信仰は本来生命がけで神に仕える道であり、そこにこそ真実の歓喜と平安があるのである。

あらかじめ招かれていた人々（イスラエル）が拒んだので、光栄ある招待は他の人々（異邦人）に向けられた。もちろん、神の究極の御目的は万民の救いであるが、イスラエルの拒否によって異邦人への福音の伝播が早められたと考えてもよいであろう。

私たちも今この招待に接して教会に集うているのである。ところが王が客を見るために婚宴の席に現れた時、一人だけ礼服をつけない客を発見し、その僕に命じてこの人を外の暗やみの中に放り出させたと言うのである。

ある聖書註解者は「ここに記されている礼服とは、王室の婚宴に招待された人たちのために王室から礼服を支給される当時の風習を意味している」と言っている。

街に出て誰彼をとわず、かり集て来た客であるとするならば、礼服を持ち合せないのが当然であり、ここに礼服をつけぬ人とは王室から支給された礼服を拒んで着用しなかった者と見るべきであろう。

キリスト者とは旧き人と、その行為とを脱ぎすて、心の深みまで新たにされて……神にかたどって造られた新しき人を着るものであると前主日の使徒書に記されていた。

神の招きに応じて教会の門をくぐっても、汚れて古びた自我と云う衣をしっかりと身につけていたとするならば、それは唯、教会に席を占めているにすぎないであろう。

多くの人たちはこの古びた汚い衣を脱ぎすてることを喜ばず、出来ることなら、すそのほころびを縫いつくろう程度で何とかして天国の饗宴に入れて貰いたいと考えるのである。主イエスを訪れたニコデモもその一人であった。だから主イエスは、新しく生れ変らなければ神の国には入れないと仰せられたのである。

教会の門をくぐるのに贅沢な衣服は無用である。むしろ今迄着ていた古い衣を脱ぎすてて神から与えられる新しい衣を着る必要があるのである。聖パウロは「主イエス・キリストを着よ」（ロマ一三・一四）と言っている。ここに「着る」と訳してある原語は「同化する」「服従する」の意である。古き自我に死んで、主キリストに在りて新たに生きる者のみが、天国の饗宴に列することを許されるのである。

三位一体後第二一主日

信仰について

十月二二日



主日の主旨　本主日は信仰による平安について学ぶ主日である。福

聖書研究のための毎週の教案



結婚問題

Iコリント 七・一―四〇

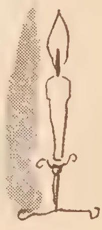
(1) 一流の綜合雑誌といわれるものの中で、男性用、女性用と区別する事は出来ないかも知れぬが、事「性」の問題に関する限り非常に異った編集の仕方に出くわすのである。極端と言ってよい程に「性」のメカニズム、心理、家庭の愛情の問題等を編集の中心のように置く後者と、とかく「艶笑的」に扱い勝ちの前者。一体若き青年男女のどちらが今日の社会状況の中で、より多く愛・結婚・性について、教育の知識の場を提供されているかと言えば、それは女性の側かも知れない。男性の側の無知？単なる同性間の秘談の業事、それも多少の羞恥の中で、そして両者が共同の「性」の語る場所は存在しない。このような状況は、そのまま、結婚の指導の貧困化をまねく。更に、とかく倫理感覚の面で保守的な教会の内部では、この問題を抽象論で事すませ、大胆な指導力に困惑を感じる。いはば教会生活の具体性の欠如が、そのまま教会への歩みを止まらせる。青年の多い教会は、そのまま家庭をしめ出し、いつまでたつても、日本の社会の中に根が下り切らない。筆者も、度々教会で経験する事だが、信仰生活における結婚の意味、又そのあり方について、一般的・世俗的・習慣的な考え方、又実際の生活態度しか持っていない青年、又若夫婦の多いのに驚かさせるのである。筆者は日本の教会の根の浅さは、信仰の遺産が正しく子孫に伝えられていない事にあると信じている。一代限り、いや一人限りの信仰を見、悲しまないでは居られない。クリスチャン・ホームの形成、それは伝道の業の大いなる働きの一部分、として、真剣な自分の問題として青年諸君の受けとるべき事柄だと思う。

(2) 今日の性道徳の混乱、余りにも人間の恥部をひきはがすような臆面なさ。唯此の状態に眉をひそめるだけで、解答の道筋を大胆に示す事に後めたさを感ずる教会の老人。一体そこにはかつて彼らが新しき倫理の確立をキリスト教に願ったエネルギーは、どこに行ってしまったのだろう。私共はコリント七章全体から結婚観を学ぶのではなく、この問題に迫って行ったパウロの信仰の気魄と、教会の配慮という二つの面を、まず学んで置こう。そうでないと、七章の論述をキリスト者の結婚についての不動の考え方、又態度と見なす恐れが存在するかも知れないから。

その底にあったパウロの態度は、「如何にして純潔なキリスト教的生活を完うし得らるるか」という事で、そこには終末観に立ちつつ自己の伝道の使命を中心に置いて、時のコリント教会の実際的問題の解決の為につくさんとする心情のある事を認めねばならない。従ってそこに、自分の「独身主義」を一般化して人々におしつけるが如き態度は生れなかった。未信者との結婚における離婚、寡婦の再婚、処女の結婚の様な面倒な問題への正当な解決。これは常に信仰が倫理を内に包む事を明示していると思う。私共の学び度い事は

相互のゆるし

十月二九日



主日の趣旨　キリスト者の品性について考えて来た三位一体節の第二期も終りに近くなって、今主日はキリスト者の忍耐について学ぶのである。忍耐は、どうかすると消極的な徳と考えられ易いが、キリスト者の忍耐は、愛を基とする忍耐、愛の発露としての赦しであり、寛容である。従ってそれは、どこまでも積極的な意味をもった徳である。

主題　**神の赦しへの応答**

福音書　**マタイ**　**一八・二三―三五**
使徒書　**ピリピ**　**一・三―一一**
旧　約　**ナホム**　**一・二―七**

祈り　主よ、絶えざる恵みをもって主の家族なる公会を守りたまえ。願わくは主の守りによりて、すべての災いを免れ、良き行ないをもって熱心に主に仕え、御名の栄光をあらわすことを得させたまえ。主イエス・キリストによりてこいねがい奉る。　アーメン

説　教

福音書に記されている、主イエスの語られた譬は極めて巧みに、そして極めて適切に、われわれがなぜ耐え忍び、ゆるさねばならないかを教えている。

王が家来の負債を計算したところ、それが一万タラントの多額に達していることが判明した。それは家来にとっては到底、返済の望みのない額であった。

我々の神に対する「おいめ」もまた同様である。我らは自らの罪の償いをなすべき道を知らないのである。もし我々が自らの罪の償いを完うしなければ神の赦しが得られないとするならば、我らは救われる望みはなきものと思わねばならない。

しかるに王は「あわれに思って、彼をゆるし、その負債を免じてやった」王の赦免は完全であり、徹底的であった。一部を免ずるのではなく、一切の負債を完全に棒引きしたのである。

この譬は、神と人間との関係を、そのままに示して余すところがない。われわれが神の前に冒した罪は数え難く、その償いのすべがない。悔改めが如何に徹底的に行われたとしても、そしてその後の生活が仮りに清く正しいものであったとしても、それは当然なすべきことを為したにすぎないのであって、その事によってすでに犯した過去の罪の償いとはなり得ないのである。

「どうぞお待ち下さい。全部お返ししますから」と云う僕の真情は汲み取り得たとしても、それが不可能であることを王は承知していた。さればこそ償いの道のない僕をあわれみ、赦し、起死回生の道を開いてやられたのである。

このような破格の恩恵に浴した王の僕が同僚に対して、とった態度がどのようなものであったか、この無情にして非道な僕のうちに自分自身を発見し得た人は幸いである。

神の赦しは一万タラントを超えたとしても、我々が同僚へのゆるしはレプタ一つにも足りないのである。このような小さな我らの赦しは神の限りなき赦しへのせめてもの応答である。

立教女学院チャプレン　**大和田　功**

の信仰に対する疑なき確信も時には生活の闘い即伝道のような乏しい生活の中で、ゆらぎ勝ちな伝道者、又その教会の若き人々を前にしてそこに「キリスト者の社会生活は、とくに私たちのような異教人社会においては、この世の慣習や慣例との衝突を招く。この際、私たちはすべてのことに自由であることを確信するとともに、教会の共同体の一員として、愛をもって人につまづきを与えないよう、つつましく行動する思慮深さを保つものでありたい」(教案の目標)等と、原則論だけを以て御説教は出来ない。むしろそこに困難な伝道の共感を味いながら、自分たちの伝道の実際問題として「パウロの偶像への供物」に対する実際的配慮を共に味い度い。ほしいものは、伝道の配慮への知識ではなく、この深い伝道の共感だから。

(2) コリントにおける問題はこうであった。教会が少数者として在る以上それを包む外部の社会との接触と交際とはどうしても避けられぬ。それだけ個々の信徒は一方で召されたものとしてありながら、他方キリスト者の一人として教会を背に負うて、この社会の中に生き且つ証ししてゆかねばならぬ。そこに外部社会の風俗習慣との相違、又習慣をして習慣たらしめている「もの・考え方」との間に軋轢が生れて来るのは当然であろう。そしてそれは、教会内にあつては信仰の強きものと弱き者との間のこの事柄に対する理解と反応の仕方によってそれぞれ異った考えを生み、そのため一見信仰的であるようで、決して信仰的でない、むしろ信仰以前の考え方によって教会に意見の対立が芽生え、両者の間に規則が生れて来ないとも限らない。事実(1)偶像への供物に関して(2)祭儀祝宴への参加に関して(3)異邦人の家庭に招かれ饗応にあづかる事に関して、問題が惹起せられたのである。八章は第一の問題とそれへの答えである。当時コリントの社会はその生活は市の南側にそびえ立つアクロコリンサスの山頂の女神アフロデトの宗教的祭儀と無関係ではあり得なかった。むしろそれに仕える女官、要するに売笑婦によってその商業地としての繁栄を維持していた為に、この神への祭儀を生活の全てがこの一点に結びつき、それだけ些細な日常の行動すらが、何らかの形で宗教的とならざるを得なかった。ちなみに市場で売り出される肉類は、まず此の神に献ぜられた後、市販されるといった具合である。そのために肉を買いかつ食うという事は偶像礼拝の汚れに浴する事になる。もしそうだとすれば、或る意味で偶像礼拝に消極的にではあるが参加する事になる。問題は此のように考えるとなると真剣である。パウロはこれに対し、どのような解答を試みたであろうか。

(1) 信仰による自由の原則論を出し、事柄の論理的解釈を以て一切は解決ずみとうそぶく輩(強き人)に対し「知識は人を誇らせ、愛は人の徳を高める」と述べて、こうした態度こそ実は教会を二分する事だと警告し、愛なき理解・解釈はよしその論理の正当さが認められても教会の道徳には無益の事柄なのだと語るのである。(2)ついで異邦生活の習慣より脱し得ぬ「弱き人」の考え方に対して「偶像なるものは実際は世に存在しない」と、ユダヤ人が毎朝夕唱うる信仰告白(シエマ)を想い起こさせて、唯一の神の信仰に生きる事を訴え、徒らな習慣的思考によって躓かぬようすすめる。それは又同時に一〇・一四―二二の論述の伏線として「強き人々」へのたしなめでもあった。(3)そこで彼は一歩福音信仰にすすみ、キリスト者の信仰の根本原則、救済論を打ち出す。それは永遠の先に神によって備えられた救主の信仰、すなわち啓示信仰、時の一点に立つ神の救の約束の成就への救済史的認識こそ肝要なのだ、この救いの体験的自己理解の上に立つ事こそ、真の問題解決の一大原則だと訴える

この所である。

(3) まず私共は私共の今日の結婚観を混乱に導いている考え方に目を向けよう。（この項マイケル、ン「危機に生きる信仰」新教出版社、第六章「結婚の危機」によった。）

(a)**搾取について。** それは佐古氏がよく言われる好き、という内容と同一である。(1)それは相手の人が自分のためにすることができるもの、そのものへの愛からする結婚である。(2)ある人が、相手の人の将来の可能性にたいする愛からの結婚、それは最も残酷な形における搾取である。(3)ある人が相手の愛を感情的に必要とするからという理由での結婚、それは、もっとも不建全な病的な形における搾取である。そこには結婚の確固とした土台は生れない。相手のその好きなものの喪失は、同時に結婚の破綻である。

(b)**愛についての非現実的見解。** それは求愛時代の愛をとりまく感情が、全く同じように結婚生活に於ても続くであろうと期待する感情である。

(c)**性についての不健全な見解。** それは愛を肉体と精神の統一として見ないような性についての諸見解を指す。私共日本人は性のルーズさという伝統的な理解からそう脱していない。この事は、結婚前の性の交わり、創造における愛の秩序、一夫一婦の制度の正しさの問題を提示するであろう。

(d)**離婚に対する律法主義。** 信仰にあって神の前に結ばれし者に離婚は許されない。イエスは首尾一貫して離婚に反対すると共に、更に離婚して再び結婚する者は、姦淫を犯したのだと言われた。そして此の事に執拗な程此の表面上の言葉に執着してそれを人々に語った人に倉田百三がある。今日では二つの態度がある。即ち離婚に関しての法的禁止に固執する事と、又安易な離婚に対する是認の考え方。私共はイエスのあの姦淫の場で捕えられた女に対する態度の中に、人々の融通性のない道徳的評価の仕方に対するイエスの恵みある態度、心情を読む事によって、離婚問題以前の結婚への考えを反省する場のある事を学ぼう。

(e)**結婚に対する無責任という状況。** 愛とは責任である。神の前での誓約は、それだけ夫婦の愛が確固たる決意による愛だという事を示している。筆者は数多く次のような人々を見る。諦めをその結婚に見ている人。ひっこみ思案の人との結婚の為に、信仰が決断力を欠いている人。そこには事態への相互の責任は失われているのだ。

このような誤った考え方を示される事により、私共は結婚の正しい関係がどのようなものであるかを指向されるであろう。詳しくは、次の書物が参考として読まるべきと思う。バルト「教会教義学・解説シリーズⅢ／4キリスト教倫理Ⅱ交りにおける自由」新教「福音と世界」一九五九・四。

偶像への供えもの

Ⅰコリント　八・一―一五

(1)雑誌「福音と時代」が「日本の伝道の困難と希望」の特集を数号にわたってやった。数年前の事である。抽象的な論義を離れた、具体的な教会のレポートは、痛く胸に迫るものがある。広く語り叫ぶ事を許されなかった伝道者たちの吐く息吹が、熱ぽく私共の胸にのしかかって来る。日本という異教社会の中で、学者の分析を身を以て味いつくしつつ、何ら解答も突破口も見出す事ができず、自分

うに外なる苦労に止るものではなかった。彼の最大の苦難、困難は律法の破棄という事であったと思う。彼の内面的改革に伴い、それが生活にもたらす変改の苦痛である。新しき生活の規範を創造する所の力である。それが観念の所産でなく、伝道の過程に生み出されたからこそ、右の苦難、困難は福音の宝となり得たのであった。パウロのパリサイ派の一員としての生活は、今日の私共キリスト者のルーズさに比較する事の出来ぬ厳しいものがあった。思想が生活を改定し、生活が考えを拘束する。生活は社会生活であれば、この思想の変革は生活のそれであり、その包む社会生活よりの離脱に連なる。そこに問題が生起するのである。パウロにあっては私共が今日の回心の際経験するような、唯単なる家庭の無理解というような程度のものでない。民族そのものよりの離脱である。しかも、血肉となったパリサイ人としての生活感覚は、いわゆるものの考え方としてその体内に残る。この対立の中に、彼の伝道の全てが存在したのであった。そしてこの変改たらしめ、離脱を離脱たらしめるのは、彼の主キリストとの邂逅による救の経験であった。厳しい自分の崩壊の音を聞く耳を持つもののみよくなし得る世界である。この事が大切なのだ。

(2) かくて、使徒行伝の研究が学んだように、彼は最初備えられた伝道の場所としてのアンテオケ教会の司牧の経験と、エルサレム教会との関係より、自分の使命に異邦人伝道の途を確認する。此の事が当然起り、且つ受けねばならぬ問題を、よく越えしめた原因であった。一体それは、何であったか。その問題とは何か。それはユダヤ人を得るためにユダヤ人のようになり、律法の下にある者には、律法の下にある者のようになる事によって起る危険である。得たはずの信仰に歪が生ずるのである。(「福音と世界」誌上に石原謙氏の「日本のキリスト教と日本基督教団の歴史的意義」なる論文が八月号から掲載されているが、祖国の教会が如何にこの事柄の中で苦難を経験しつつ、今日のような状況に止まざるを得なかったかが、詳細に論述されている。事実異教社会として特殊な文化と風習の中にある教会は、人を得る目的の為に、多くの妥協をなし、それが愛なき強き人の自己弁解の様な解釈と相俟って、教会の姿を歪めて来ているのである。パウロは、或る特殊の教会との財政的内体を結ぶ事が、困難な問題をひき起す原因となる事を知っていた。この事から、彼が得たものは、こうした危険を突破する事は、即ち「すべての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために自ら進んですべての人の奴隷になる」という奉仕の道であった。これが伝道の道なのだ。

私共には、この自由も、奴隷の道も、奉仕も、それが打って出てゆく「すべての人に対してはすべての人のようになる」事への躊躇が多すぎる。それは本当に自分の信仰の無力の宣言ではあるまいか。福音主義の単純な信仰形態の中にその信仰を安住せしめようとする。自己中心の姿でありすぎるように思う。

単元四　愛の共同体

設定の理由

社会生活の人間関係は、教会の愛の共同体の訓練において確かな原理を身につけることができる。人格関係は対人関係であるより先に、神との関係である。家庭や学校や職場での対人関係に各種の問題をもっている私たちが、もう一度教会の愛の共同体である教会の現実に目をむけるようにしたい。

目標　現実の教会の問題としてコリントの教会にあたえられた愛の問題を研究し、教会員としての生き方を確立する。

のである。

確かに「強き人」のそれは確固たる解答に違いない。「弱き人」への解答は唯一神信仰への復帰という事によってなし得よう。しかし問題はこれで終りはせぬ。それはいづれもそれが事柄の知的理解で、そうあり得ぬ人を無言の内に審く事になるからである。見逃してならないのは、此の種の「信仰自由」が、時には人々の躓きとなるという事である。それ故、パウロにキリストの贖罪の愛の本義に触れ「もし食物がわたしの兄弟をつまづかせるなら、兄弟をつまずかせないために、わたしは永久に、断じて肉を食べる事はしない」と宣言するのである。そこに弱き兄弟へのいたわり、躓きを与えざらんとする愛を見る。最も大切なのは、此の躓きへの愛の顧慮なのである。(4)かくて最後に愛の業こそ信仰の復帰と反省を強い、これによって教会は二分せらるる事なく、正しく且つ高きクリスト者の倫理生活が、此の世の光となる事を祈るのである。問題の中心は教会の愛による建徳なのである。

㈢ 今日の私共の教会の内、又周辺には、日本的習慣、又ものの考え方というものに躓いて、信仰の周辺でウロウロし、真の福音信仰に入り難きたくさんの人々を見る。そしてそれに対し教会は余りにも無力すぎる。それは一つ一つの各個教会の問題でなく、広く日本の教団の相互の問題である。かって、或る一つの事柄をめぐる「強き人」の論争が、地方の教会に深い動揺を与えた事は、この困難な伝道への共感、愛の顧慮のない所に論理の強さが先行しすぎたためである。同時に習俗より脱し得ぬ程の強力な思想と、生活の結びから来る圧力を私共は過少評価してはなるまい。次の書物は秋の冷夜にはその為のよき書物と思う。南博「日本人の心理」飯塚浩二「日本の精神的風土」高木宏夫「日本の新興宗教」いづれも岩波新書)。

ただ　福音のために

コリント　九・一九―二七

(1)　「わたしは全ての人に対して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隷になった。ユダヤ人にはユダヤ人のようになった。ユダヤ人を得るためである」「律法のない人には律法のない人のようになった。律法のない人を得るためである。」パウロの此の言葉を学ぶ時、注釈は容易であっても、こうなるためには、如何に困難な問題が、内と外に横わっている事を思わないでは居られぬ。私共は今、パウロ自身の味った事柄の内容に触れ、私共の問題とする所を与えられたいように思う。

パウロの目的は福音を宣べ伝え、救の恩恵の中により多くの人々を招き入れる事であった。この業を主イエスが「人を漁る」と譬えられたように、パウロは「人を得る」という。「得る」(κερδαίνω)とは元来「儲ける」の意味を持つ語である。パウロはテサロニケ二・九、或はⅡコリント一一・九に暗示されるように、金銭のために伝道を為すものの如くに誤解されていたようだ。それに反駁して彼は自分は金儲けの為に伝道しているのではない、自分の主義は「人儲け」なのだと暗に斯る誹謗者に答えつつ、商業都市の人々に共感を得る語句で、自分の伝道の困難を語ったのであった。その困難は、九・一二の「忍んでいる」という言葉が示すように、全ゆる苦労(四・一二―一三)又苦難(Ⅱコリント一一・二三以下)のよ

されているといえよう。それはあってはならない事、否あり得べからざる事だ、そこには既に「主の晩餐」はなく「己の晩餐」に堕しているという非難、即ち主の召し、又信仰の共同体より破れ去っている姿を指摘するパウロの心情がよく示されている。そこにあえて強い命令（モファットやNEBは injunction 禁止命令、断言命令と訳している）を教会に対してなさねばならなかった事情が、明瞭に示されるのである。明らかにそれは世の秩序が教会の中に乱入した姿である。「或は、異教時代の社交的会食における無策制無礼論の悪習慣が、聖餐の厳粛なるべき式典にも移されて、こうした乱行となってあらわれるに至ったのかも知れぬ」（松本卓夫・新約聖書要解・コリント前書）。そこでパウロは二三〜二六節に、主より授けられたものとして、具体的な史的伝承を以て臨み、聖餐が主の晩餐に、即ちキリストにその根源のなる事を示して、聖餐の本義を示しつつ、其の教会の一致は、この礼典に正しい参与する事によってなしとげられる事をあらわそうとしたのである（今日この聖餐の守り方によって教会の不一致のある事は悲しい事だ）。これが彼の断言命令の一切であった。私共は、此のパウロの問題解決の方途を先づ学ばねばならぬ。

(3)　さて二三—二六の聖餐の制定語としての記事の他の箇所（マルコ一四・二二—二五、ルカ二二・一七—二〇、マタイ二六・二六—二九）との比較研究は又興味のある事柄だが、その方面は解釈者で学んでほしい。ここではパウロの聖餐観を略述するにとどめよう。

パウロにあっては主の晩餐とは、信徒と教会の主キリストとの霊的な交わりの手段である。先にも述べた如く、その起源をイエスの最後の晩餐に置いている。しかし少くともパンがさかれ、「酒杯が飲まれる」という点は、そこにキリストが死より甦みがえり給うた後に、主と共に使徒達が食い且つ飲んだ事の記憶とその復活の証人としての業に（行伝一〇・四一）根拠が置かれるとみるべきで（クルマン）そこには新に、イエスの犠牲と死を記念し、その救に感謝する事が（εὐχαριστεῖν）加えられ、更に終末的祝宴の前祝いとして、主による完成せられし神の国の業が予表せられているのである。従ってそこには交わりの中に臨在し給う主キリストへの信仰、それにあづかり、交わりを与えられる業であって「わたしたちが祝福する祝福の杯、それはキリストの血にあずかることではないか、わたしたちがさくパン、それはキリストのからだにあずかることではないか」（Iコリ一〇・一六）という主の晩餐の祝福が語られるわけである。

従って、主ののこし給いし此の晩餐を通じてキリスト者たちは、「霊なる主の生命を受け、養われて信仰において強くなり、かつ信徒相互間の交わりが堅うされ、教会の建全な発達」（山谷キリスト教の起源上三七八頁）がなさるべき事が強く語られ、且つ祈られるのである。同時にそれは外に対しては、神の国の終末的希望の証しの業である。それ故、受くるにふさわしくない信仰をもって此の晩餐にあづかる事は、あたかも荒野において滅ぼされたイスラエルの民と同じように「Iコリ一〇・三—五）、神の審きをうくべきで、又「主のからだと血とを犯す」ことになり、「その飲み食いによって自分にさばきを招く」ことになる同一一・二七、二九）。同時に晩餐は教会の一致の力なのである（同一〇・一七）

今日の私共は此の主の晩餐を、どのような事で受け且つ守っているか。ここに新な礼典の問題を学ぶと共に、教会の現状への反省を深くなしつつ、パウロの教会一致への祈りを深く学びたい。

主の晩餐

Ⅰコリント　一一・一七－三四

(1)　都市の中心にありその感容を誇る大教会ばかりではない、少くとも古い歴史を持つ教会が、しばしば直面する問題は、教会経費の出費の大きさを、如何なる種類の収入によって支えるかという事であろう。その解決に当っては一人一人が分に応じた献財をなすという努力よりも、教会への献金は現状で圧えておいて、他に種々収入の途をはかろうとする。曰く、会堂の一部を貸したらよい、大いにバザーをやるがよい、牧師への謝儀は当分現状で忍んでいただこう……。或る意味で地域社会への歴史的位置を失い、信徒は、その地域の移動人口の上にある教会は、新な脱皮と、伝道方策を持たねばならぬのに、それへのエネルギーは出しおしんで、いや気付かずに、右のような事と考え、あまつさえ、昔は一人で多額の献金をしてくれる有力信徒があったのにとつぶやく。ここに深い今日の教会の病根がうづいているのを眺めることが出来る。それは特に排金主義というものでなく、主の前に一つであるべき教会の交わりの中に、此の世の貧富の差、能力の差、そういったものが持ちこまれ、それをそのまま是認し、それにせんじようという真の交わりの喪失が潜んでいるからに外ならぬ。伝道者の一番心を配り且つ注意せねばならぬのは、此の世の何らかの力というものと、教会の安との関り合いと思う。その場合、教会の理想的姿を以て審いてはならぬ。そうあってはならぬ為の神学的訓練が平生肝要なのである。又具体的実際的配慮が必要なのだ。パウロはコリント教会のこのような、いつしか生じた貧富の差別から生ずる階級的分立をどのようにして解決に導いていったか。この配慮と努力と教会への愛なくして、其の世の平和は到来しないのである。

(2)　当時聖餐と愛餐との区別はなかった。一週のはじめの日、即ち日曜たる「主の日」に、キリスト者達は相集い、パンをさき、食を共にしたのであった(行伝二〇・七－一一参照)。その場合彼等は各自食物を思い思い持ち寄り、互に分け合って食する事にしていた。それは信徒が相互に一つに統合する兄弟愛の素朴な外的な表現としてあったのである(モファット)。パンをさく事により、(それは食前或は食後であったが)、主の贖罪愛、又主の奉仕、献身を学んだのである。最初は素朴な精神の喜びとしてあったものが、時を経るに従い、特にここコリントにあっては段々形だけが残り、その為精神が失われ、単なる食事と化してしまった。富める人々は、他の信徒を待つという事もしないで、持参の食事を「かってに先に食べる」という有様で、奴隷の身分の信徒たちは、ようやく労働より解放され、それはユテコの場合のように、非常に疲労を味うものであったろうが、にもかかわらずその信仰の熱心に於て急ぎ共に主の交わりに加わらんと馳せ参じても、共に食する事も出来ず、粗末な食事、残り物を手にするか、時にはそれすらも持ち合わせず、空服をかかえねばならぬ始末であった。そのため「飢えている人がある　かと思へば、酔っている人がある始末である」と誌されるような事態が起った。もちろんそこには、極度な対立等というものはなかったろう。しかしこの状態をパウロは「分争（αἱρέσεις）」と呼んでいるか、この言葉はその背後に不吉感、又いやらしさを含む。従ってこのコリント教会の状態に対するパウロの苦々しい心持がよく表現

分け「賜物」「務一」「働き」としているが、「賜物」とは神の霊が原動力となって現われた現象、「務一」はその奉仕的性質、「働き」はその目覚ましい効果的な活動の方面を力説した用語である。（松本前掲書二一〇七頁ＩＣＣ二六三〜二六四頁参照。）いづれにせよ働き給う神は一つなる神なのである。ついで九種の賜物をあげている。決して彼が意識的にこれだけのものとして分類したわけではないであろうが、「ある人は（αλλω）」又「ほかの人（ετερω）という異った用語を手がかりにすると、次のように分類出来る。(1)智慧の言葉、知識の言葉、(2)信仰、いやし、力ある業、予言、霊をみわける力、(3)種々の異言、異言を解く力。これをも少し精密に排列し直すと、(1)知識及び理解力に関する賜物、(2)奇跡を行う賜物、(3)予言の賜物、(4)霊的現象の識別及び批判の賜物、(5)異言の賜物。となるであろう。第一の「智慧の言葉、知識の言葉」とは、神の言の奥義を解明し、救の意義を理解して、解説し、論述し得る賜物の事である。即ち「知識によって福音の根本原理を知的に把握し、智慧によって他との諸関係を抱括的に検討する（ＩＣＣ）」ティリッヒが組織神学の第一頁で言っている次の言葉は、まさしくこの事を指すのであろう。「教会の一つの機能としての神学は教会の要求に応じなければならない。神学体系はキリスト教のメッセージの真理の叙述と、この真理を新時代が到来するごとに、それに適応し解釈するという二つの基本的要求を満すものと考えられている。神学は二つの極、すなわち、その基礎であるところの永遠の真理と、この永遠の真理が受け容れられなければならないその時代的状況との間を往復する」と。「信仰」とは奇跡と関係を持ついわゆる「山を移す程の大なる信仰」（マタイ一七・二〇以下）である。「いやしの賜

言」とは一四・三に示されるように、力を以て福音の言葉を宣べ伝え、信仰を鼓舞して、教会の徳を高める賜物である。「霊を見分ける力」とは霊的事象に対する批判と識別の力を指す。「異言」が最後にあげられたが、それは教会の躓きにこそなれ、建徳にならない故であろう。そして二八節以下で、この賜物が具体的に生かされる教会の職責が九種、先の表と対表的にあげられている。「使徒（智慧の言葉）」「予言者」「教師（知識の言葉）」、「力あるわざを行う者」、「いやしの賜物を持つ者」、「補助者（執事・監督）ピリピ一・一参照）」、「管理者（主として教会内の経済的肉体的援助をなす人、教会全体の統一、行政に尽す人を指す。Ｉテサ五・一二、ロマ一二・八、ヘブル一三・一七、二四、行伝二〇・二八）」、そして「異言」と「異言を解く者」。全ては大いなる教会の一致の業にのみ仕えて、その職責を全うするのである。

案外私共は霊の賜物の自己への探索をこばんではいまいか。それは自分の力の誇り以外の何ものでもないのである。

表紙説明

クリスチャンの希望を表わす錨

ヘブル六・一九に「この望みは、わたしたちにとって、いわば、たましいを安全にし不動にする錨である」とある。そこに錨の絵を描いて、クリスチャンの希望を表わすことが古くから行われてきた。同じようなシンボルには、黙示録八・三にある祈りを表わす香炉、黙示録一四・二にある礼拝と讃美の音楽を表わす立琴等がある。

愛の賜物

Iコリント　一二・一—五一

(1)　今日の伝道方式のように、余りにもそれぞれの賜物が生かされない状況が続くと、結果は「知識は人を誇らせ、愛は人の徳を高める」という事と反対の事が起り、教会の徳は立たず、分裂と停帯の危機が迫って来ないとも限らない。この賜物が生かされぬという事に二つの原因があると思う。それは主によって召された事は、同事に此の世に福音を宣べ伝える課題を与えられているという事で、神はその人に最もよき賜物を与えて、それをなさしめようとされているのであるから、神に向い、己が賜物とは一体何なのかと問い且つ探索する事に外ならない。この事がなされず、自分の表面上の能力によって、それを自分の賜物と断定する誤りである。私共は全てを神によって与えられたのであるから、全てを神に委ね奉る事により、この委託の中に賜物を見出すのであらねばならぬ。これが第一の原因である。第二には、その為、知識・能力・賜物等が、有機的・組織的に生かされない伝道者派遣の仕方の無責任さ、それが伝道者をして（それは一部にすぎない事と思うか）都会教会・大教会への出世主義的な感覚をいつしか養わしめ、又人間関係によってそれがなされようとする傾向によってである。いづれもそれは「イエスが主」の告白に連らなるものでなく「自己が主」の誇りに堕す危険を充分にならんでいる。今日「教会の体質改善」という事が叫ばれているが、まず、ここに私共は最初の瞳をすえなければならないように思うのである。

(2)　コリント教会は、霊の賜にめぐまれていた教会であり、それは宗教的情熱によって、異常な行動や現象が極端にあらわれ、それを超自然的な働きとし、極端にこの発揮に熱中して、真の信仰より逸脱する傾向があった。特にそれは「異言を語る」という事であった。この事は自己に内在的なもの、特有のものを賜として主張する自己主張の一つに外ならない。パウロは、このように原因の所在を認めても、そのように人の病みに入りこまず、建徳的な方法で人に悔改めを迫る。即ち現われた霊の賜の諸現象を一つ一つ認めながら、「イエスは主である」という告白が個人の意見・感情から出るべきものではなく、飽くまで上よりの実感によってのみ可能であり一切はこの信仰に立脚する賜物のみが、純真な霊の賜物なのだと、一般と高い、且つ信仰の根本問題を提示する事によって反省を促す。ここにも正しき霊の賜に生きた伝道者パウロの謙遜を見る事ができるのである。私共であるなら原因を分析、論述、断定する事により、人の心を決る事が多いのではあるまいか。信仰のすすめをなすには同時にそのすすめそのものに自分が生きておらねばならぬのである。かくてパウロはこの一点をあおぐ事により、それぞれの賜物は、相互に統一と調和とが与えられるが、人間の身体を比喩にとって（それは新約時代のストア派の人々のよく用ゆる例で宇宙の調和、社会生活の結合の説明に用いられ、よく当時の人々の知る所であった）、キリストと教会との神秘的結合の事実を示しつつ、各自の授けられた務めは異っても、互に補い合って、全体のよき発達と福利の為に貢献するようすすめた。

ここに誌されたものは既に当時コリント教会を含め諸教会にあらわれた賜の種々相であるが、今日の私共がその賜物を探索する手が

「わたし」が、神との交わりに入ることができるのは「めぐみ」にのみよるのである。しかしこの「めぐみ」は、神の子の死という大きな犠牲をもつめぐみであるから高価なめぐみであるが、それにもかかわらず、教会では、ともすれば、この高価なめぐみを、安価なめぐみにかえてしまっている。罪人が、義とせられるのではなくて、罪が、是認せられているのである。神のめぐみが、神と「わたし」の間の破れを、正常に回復するだけでなく、あらゆる故障をとりのぞいて、キリストを信じる信仰によって「わたし」を神のみまえに立たたせて、生ける交わりに入ることをゆるすのである。このことがすこしも、崩されないで、伝えられるかぎり、罪が、是認せられることは、考えられないのである。神の側における、熊類に高価なめぐみが、人間の側において、あまりにも、安価に、うけとられ、神との破れさえ、見すごしにされるならば、教会は、教会としての姿さえとりえなくなって、地上での笑いものにせられてしまうのである。

看板にいつわりある教会の姿に対し、われわれは、今一度、反省すべきではなかろうか。ドロを塗られた教会に対して憤慨する者は多い。しかし、憤慨だけでは、解決にならない。憤慨だけにおわるなら、憤慨する者も憤慨の対象になる者も、同一レベルに立っているのである。両者に、分離はない。義憤は、対象のただ中にあるとき出てくる。状態の改革は、義憤だけでは駄目である。積極的対策の実施が、必要である。ルターは、このことに基本線をうち出してくれた「大胆に罪をおかしなさい。しかし、大胆にキリストを信じキリストにおいて喜びなさい」と。

大胆に罪をおかせとは、まことに、奇妙な言葉である。ボンヘッファーは、これを説明して「罪をおかせ」とは、自分が、罪人にして、罪人のほか何者でもないことを大胆に告白することであるということ。そして、大胆に、キリストに走っていくのである。ここに、罪との絶縁と、キリストによる新生とが約束されるのである。

今日の教会に、この大胆さが、欠けているのではないか。第一義的な問題に心をうばわれているのではないか。世界の変化の目まぐるしさに圧倒されて、キリストによる創造のすばらしさに、圧倒されることがなくなっているのではないか。バンヤンは、罪の重荷を負って世から逃れようとした。しかし、むしろ、罪の世のまっただなかで、大胆に、神との破れの解決キリストにおいてやってのけることこそ、われわれの行くべき道である。ここから、キリストに従うことが、本格的な姿をとって、でてくるのである。

キリストがこの世に、はいっておいでになったように、キリスト者も、この世に、はいっていくのである。この世からの逃避でなくて、キリストの証示者として、この世に、はいっていくのである。宣教師だけでもなく、牧師だけでもなく、キリスト者全部が、この世に証示者としてはいっていくのである。神が、髪の毛一筋まで、心にとめたもうように、キリスト者も、キリストのなかでこの世のことに対して、関心をもちつづけるのである。手足をうばわれている人でも、祈ることは、ゆるされているのであろう。

新しい信徒観

コリント　一二・四—一一

人間の考えは、とかく、一方に片より勝ちである。そのような性癖のために、神のことばさえ、まげてしまうこともある。神が、万

信徒学級

新しい信仰生活



信仰と日常生活

ピリピ　四・一〇—一三

人間は、正常である限り、かならず他者をもって、これと接触して生活する。最も本格的な、また、基本的な形は、神と「わたし」そして、神を媒介とした、人間と人間との交わりである。ルターは神とは何であるかという問に対して「神とは、われわれが、このお方から、よきものを期待し、困難なときに、かくれ家とすべきお方である。したがって、神をもつということは、心からこのお方を信頼し、信じることにほかならない」と答えている。そして、さらに言葉をつづけて、信頼と信じ方一つで、真の神との交わりともなり、また、偶像を神とすることにもなるといっている。だから、真の生ける神との交わりに入れられるためには、まず、人間が、神によって、神との正常な関係に立たされなければならない。何といっても、神との正常な関係が、基本となるのである。

神は、キリストにおいて、最も、あきらかに「わたし」に、神のみこころを見せて下さり、キリストを信頼し、信じることによって、偶像からはなれて、生ける神との交わりに入ることが、ゆるされるのである。生ける、まことの神は「わたし」を完全に支配し髪の毛一筋の末にいたるまで、わたしの生活に責任をもつお方である。これに反して、偶像は「わたし」が、これに対して責任をもつのである。偶像は「わたしの心」の投影にすぎない。それは「わたしのロボット」である。まことの神という名をつけた偶像がどれほど、人間によろこばれていることであろう。それは、こちらの注文通りになるからである。注文通りになるはずである「わたし」の「かげ絵」なのだから。

生けるまことの神は「わたし」の注文通りにはいかない。むしろ「わたし」にむかって「わたしこそ、あなたの主である」と言いわたして「わたし」を支配なさるのである「わたし」は「わたし」の主ではなくて「神」こそわたしの主であるというのである。「わたし」の行く道は、二つに一つである「わたしが主である」と言うお方に、従うか、このお方に反逆するかである。偶像をうけるか、つまり、自己主張に生きつづけるか。生けるまことの神のみまえに、降服して、このお方を信頼し、信じるか。このどちらかをえらばなければならない。信仰は決断である。その決断の場は、神が、あたえてくださるのである。だから、神のなかでの決断といってもよい。

ボンヘッファーは「主に従うこと」という書物のなかで、神との交わりの生活が、キリストを信じる信仰によってのみ、実現されることを、よく説教している。神に、反逆し、神からはなれている

とずれと同じ内容をうけとるのである。したがって説教と礼典とが正しく行われることが、教会の目じるしになるのである。

このような救いの道は、特定の階級だけに、開かれているのではなくて、万人に開かれているのである。条件は、キリストを信じる信仰だけである「信仰のみ」ということは、信仰のほか、何も必要としないということである。人間が、神をよろこばせようと思う善行も、いわゆる信心三昧の聖者の功徳も、必要でないばかりか、そのようなものに、たよることは、三位一体の神から、目をそらすことになるのである。イエスは、ペテロにむかって「わたしを愛するか」と問いたもうたが、イエスを愛することは、信仰を前提とするのであって、イエスから目をそらして、イエスを愛することは、絶対にできないのである。信仰は、神との交わりに入る、ただ一つの通路である。

このように考えてくると、問題は、きわめて、はっきりとしてくる。神のみまえには、すべての人は、同じレベルに立っている。神は、何人をも片より見たまわないからである。しかし、このことは、十人が十人、一色であるということでは、決してない。十人十色である「からだが一つであっても肢体は多くあり、また、からだのすべての肢体が多くあっても、からだは一つであるようにキリストの場合も同様である。なぜなら、わたしたちは皆、ユダヤ人もギリシャ人も、奴隷も自由人も、一つの御霊によって、一つのからだとなるようにパプテスマを受け、そして一つの御霊を飲んだからである。あなたがたは、選ばれた種族、祭司の国、聖なる国民、神につける民である。それによって、暗やみから驚くべき光に招き入れて下さったかたのみわざを、あなたがたが語り伝えるためである。これらの聖句が、これまで述べたことを、うらづけている。

より深い教会観

ローマ　一五・一四―二一

この世における教会の姿は、どの時代においても、検討の対象となる。スウェーデンの神学の主題の中は、国家、教会、職業が、いつも加えられている。この方面の研究が、盛んになされている。スウェーデンにおけるルター研究の草わけの一人であるビリングは「ルターの国家観」とか「職業観」で有名であり、最近では、ヴィングレンなど若手教授の研究も、この分面を中心としている。ヴィングレンの「ルターの職業観」は、高く評価されている。スウェーデンに限らず、世界の教会が、この方面に関心をもっていることは疑いないことである。さらに、これらの主題が、含んでいる問題を相互にからみ合せた研究も発表されている「教会、律法、社会」という、アウレンの研究が、その例である。これらの研究から知られることは、世界の教会の関心が、この世における教会に注がれているということに、ほかならない。

教会は、キリストを信じる信仰を通して、神にむすびついている人々の交わりである。したがって、この人々は、キリストのために生きているのである。だから、一挙手一投足ことごとく、キリストのみこえのままに動くのである。キリストが、救いの完成者でありこのお方以外のところに「わたし」の救いは、ないことを確信するなら、このお方にこそ、一切をゆだねるのが、正しいことであろう。しかし、現実には、教会は、この世に存在しているのである。

人の救いを完成してくださり、万人は、同じ水準に立って、この救いにあずかることをゆるされているにもかかわらず、いつのまにか救われるのは、まず、特定の階級にぞくしている者にかぎるといった考え方が、支配し、その他大勢は、その特定の階級の支配のもとに立って、神からのめぐみでなく、人のめぐみによって、救われるといったことが、あたりまえのようになる。

宗教改革の大きな貢献の一つは、キリスト者は、みな祭司であるということの強い主張であった。パウロは、律法主義的キリスト教を破って、福音主義的キリスト教を前面に押し出したが、改革者はこの線に、いつでも立つのである。ここから、逸脱すれば、必然的に人為的な救いの見解が、頭をもたげてくるのである。そして、いつしか、救いに関する鍵が、一つの階級に、にぎられて、悪用せられ弊害をかもし出すのである。宗教改革の流れを汲む教会であっても決して油断は、できないのであって、制度上では、そうでなくてもそれを運営する人間によって、この悪弊が、支配的になる可能性は実に多いのである。

日本の教会を例にとっていえば、百年の宣教において、ある面において大きな役割を、教会は、果してきたことを否定するものではない。しかし、どこの伝道地においても見うけられるような面をもっているのである。それは、教会が、ある程度まで、発展するまでは、牧師または宣教師が中心であるということである。教会の発展とともに、教会の本格的な姿に切りかえていかなければならないのに、またそれが、信徒の交わりの形成であるのに、何か自分の所有の権利の移譲のように考えるところに、好ましくない傾向があらわれてくるのである。これと反対に教会の会員が、牧師職を対立関係におき、平信徒階級、牧師階級といった考え方を生み出すのも、同様に、教会の悪弊といわなければならない。

ここは、教会の教職論の場所ではないので、論じないが、日本の教会は、もっと、深く、この問題について、聖書によって、考えておく必要があると思う。われわれは、模倣に満足しすぎていたのではないか。それだけに、足場固めに、自分のものが、すくなく、借りもので間に合わせている状態ではないであろうか。宣教第二世紀に入ったのであるから、脱皮の時期にあるように思う。

脱皮とは、むやみに、新しい制度を案出して、古い制度をすてるといった制度に中心をおくことではなく、心の脱皮である。このことが、むしろ、むつかしい問題である。この点になると聖霊の力にまつほかはない。そこで、日本の教会の直面している大きな問題、そして、一歩あやまれば、悪弊ともなりかねない問題と、とり組むためには、教会論からはじめなければならない。そして教会論は、聖霊論とかたくむすびついていることを知っておきたい。いや、聖霊論といった「理論」ではなくて、この「わたし」自身が、聖霊によるはたらきかけをうけなければならない。それには、聖霊は、いつでも、みことばを、通して、われわれにはたらきかけることを記憶しよう。みことばから、はなれた聖霊のはたらきはないのである。みことばのあるところ、聖霊のはたらきがあり、聖霊のはたらきのあるところ、そこにみことばがある。みことばなしに、聖霊のはたらきがあるとすれば、聖霊のはたらきと称せられるものは、三位一体の第三位格なる聖霊のはたらきではない。

教会とは、キリストを信じることによって神のみまえに立ち、神との交わりに入ることをゆるされた人々が、キリストを媒介としてもつ、相互の交わりそのものである。そして、交わりに入れられる一人・人は、神との破れをいやしたイエス・キリストのよきおとずれをきいて、これを信じつづけ、洗礼と聖餐とによってこの事実を口をもって見、手をもってふれ、このことによって、言葉によるお

ことは、歴史が示しているところである。教会は、このようなことには、愚かでなければならない。このようなことに、みんなが、愚かであれば、このようなことに興味をもつ者は、手のほどこしようがなくなる。キリストのために、この世のことに大馬鹿になることが、教会の純粋性をたもつ唯一の道である。すべての信徒が、キリストのために愚者となったとき、万人祭司の真の意味が実現せられ、外への宣教が、十字架の旗じるしのもとに進められるのである。まだまだ、われわれは、かしこすぎる。

キリスト中心宇宙論

コロサイ　一・一五—二〇

使徒信条は、父なる神が、天と地とを創造したもうたことを告白している。キリストは、罪をあがなってくださるお方としてだけ告白されている。たしかに使徒信条は、三位の神を告白する点において特徴をもってはいるが、一体の点において弱い。これをアタナシオス信条がおぎなっている。その第三条には「公同の信仰とはこれである。我らが一つなる神と三位において、三位を一体において、礼拝することである」と告白している。さらに、創造について、使徒信条の弱点を、ニカイア・コンスタンチノポリス信条が、おぎなっている。それは、父なる神も、子なる神も、聖霊なる神も、創造に参与しておられるという告白をしているのである。コロサイ一・一五—二〇には、あきらかに、キリストが、創造者であることをつげているのであるが、ニカイア信条は、このことを告白するのである。キリストは、神が、受肉したお方であるといい、この受肉者は、下僕の姿をとっておられるので、いわば、神の微行の姿であるともいわれる。しかし、このお方は、単なる下僕ではなくて、万物の創造者また、支配者でもありたもう。われわれにとって、いちばん、やっかいなことは、下僕でありながら、宇宙の主であるといった議論をきかされることである。われわれの頭脳は、そのような理論に、合わせて廻転しない。下僕なら、下僕として終始し、宇宙の主ならそれとして存在するとだけいうなら、筋が通っており、こちらの歯車も、それに調子を合せることができるのである。しかし、キリストに関してくると、全く相反するものが、同時的に語られるのであるから、始末がわるい。

しかし、聖書は、神のみわざについて語るとき、しばしば、逆説をもちいる。サムエル記上二章もその例である「飽き足りた者は食のために雇われ、飢えたものは、もはや飢えることがない。……主は殺し、また生かし、陰府にくだし、また上げられる。主は貧しくし、また富ませ、低くし、また高くされる。貧しい者を、ちりのなかから立ちあがらせ、乏しい者を、あくたのなかから引き上げて、王侯と共にすわらせ、栄誉の位を継がせられる。地の柱は主のものであって、その柱の上に、世界をすえられたからである」。

神と人間との関係が、正常でないときでも、神は、はじめの契約を守っておられるが、人間の側においては、その契約をふみにじってしまっている。それにもかかわらず、神は、われわれに近ずいて正常な関係の回復の道を開いて下さったのである。われわれの方が正常でないので、神のなさることは、われわれの注文に、はまらないのである。

だからといって、現在われわれの世界において、国と国とが、外交戦術で、平和をたもっているような、仕方で、神は、神と人間と

日本の場合、異教社会のなかにある。また、経済的、政治的、文化的にいっても、決して、教会の立場と調和しているとは、いいがたい。教会の会員も、このような複雑な状況のなかに実際に生活しているのであるから、単純に問題をかたつけることは、できない。長い間キリスト教をうけている国においては、礼拝の自由がある限りたとえ、信仰から、はなれた者が、多数あるにしても、彼らの言動を支配しているものは、キリスト教であるから、教会と国家との調整には、相互の理解に立ってなされる。しかし、異教社会や反教会的社会においては、事柄は別である。

さらに、日本をも含めてアジアとアフリカとは、急激な社会的変動のなかにある。このような背景をもっている日本のキリスト者は多くの問題をもち、大きななやみをもっているわけである。多くの問題と大きななやみとをもつことは、決して、よい気持ちではないがだからといって、これは、われわれにとって悪いことだとは、いいきれない。キリスト者にとって、試練のないことほど大きな試練はないということが成りたつなら、いま、われわれが、うけている嵐は、かならず、よいものを生み出すにちがいないからである「神は、神を愛する者たち、すなわち、ご計画に従って召された者たちと共に働いて、万事を益となるようにして下さる。このことは、一人のキリスト者にとって真であるとともに、信徒の交わりである教会にもあてはまるのである。

このような意味で、日本の教会は、いま絶好の機会にめぐまれていってもよいであろう。

この急激な社会的変激のまっただなかで、これにひきずられないで、独自な立場において、教会を構成する「わたしたち自身」を検討することが、できる点にまで、達したということは、何といっても、めぐみである。したがって、これが、宣教第二世紀の初頭において、われわれに課せられた課題である。

この問題と取りくむためには、いくつかの面から問題に接近しなければならない。

第一、聖書における教会の研究

第二、歴史における教会の研究

第三、日本における教会の現状と将来

これらの問題が、研究され、その結果、現在、われわれが考えており、また、実際にやっていることと、大きなひらきのある結論がでるにしても、もしそれが、聖書にてらして正しいものであることがわかれば、勇気をもって、これを推進すべきであろう。日本の教会の現状は、いわゆる植民地的教会から、土着教会まで、色とりどりであるから、単純に言うことはできないけれども、次のことだけは、言うことができるであろう。すなわち、宣教師であれ、牧師であれ、有力な信徒であれ、救いに関して、キリストの仲保をおぎなうような意味の仲保の役をもつことはできないということである。キリストは、何人をも、また何物をも、媒介とせずして、直接「わたし」に出会いたもうのである。いやしい下僕の姿で「わたし」に近ずきたもうために「わたし」は、彼を、救い主とみとめることが、むつかしい。われわれの理性をもって、下僕なるキリストをとらえようとしても、それは、できがたい。なぜなら、理性は、下僕なるキリストこそいと高き神であることを見抜くことができないからである。そこで、信仰によって、この逆説をとらえるよりほかに道はない。この信仰は一つである。階級はない。教会の純粋性は、この一つなる信仰が、堅持せられる限りたもたれ、教会の機能を発揮することができるであろう。この信仰が、種々加工せられるときには、教会は、外界に対して閉鎖的となり、やがて、生命をうしなってしまう。制度に重点がおかれ、階級と権力とが中心問題となる

職業の選択ということは、むつかしい問題である。ことに客観的情勢が、選択といったゆとりさえないほど、きびしいとき、いっそう困難である。それにもかかわらず、本格的な姿をもつ職業選択が、要求されている。それだけにキリスト者は、二重にも三重にもの苦しさを味わうのである。この覚悟は、われわれに、必要であろう。広い道は、われわれには、開かれていない。道は、せまいのである。第二義的なことで苦しむのではない。キリストの苦しみのなかで、苦しむのである。このコツが、むつかしい。キリストとのつながりを、おしげもなく、すてて、安きにつこうとすることもあるが、これは、かえって、重荷を、自分のうえにおわせる結果になる。技工をもって、仲よくなることをもとめるよりも、真実をもって、人のたましいにふれよう。やはり、年期をいれることが、必要である。はやく結果を見ようとするのが人情ではあるが、セッカチであってはならない。地道に進み、キリスト者の香りをいつのまにか、はなつコツを、各自が、身につけることが重要である。

実生活の処方箋はない。各自が、キリストのなかにあって、苦斗したその実験談をもちよって、相互に参考にしあうがよい。そこに隣人から学ぶものが、見出されるであろうし、自分のを、与えることもできよう。散らされた者たちが、交わりの時に、わかちあう経験は、祝福をうけるであろう。

キリストを信じる者は、聖徒といわれる。彼は、いわゆる聖者ではない。聖徒とは、いつも、神のみまえにあることを意識し、罪のゆるしを信じるとともに、自分は、罪人のかしらであることを思う者のことである。いつも神との交わりにおり、同時にいつも、罪人である自分をわすれない。神は、いつも、近くにいますことを信じながら神と自分との距離は、無限に遠いことをいつも忘れないのである。神とわたしという対立関係のなかで「わたし」が、神に近づくために、努力するというのではなくて、神が、キリストにおいてなさるみわざのなかへ、自分を、まかせて、そこで、聖霊の、み助けにより、みことばを味わい、祈りをし、試練にかかって行くのである。これが、義とせられた者が、たどる聖化の道である。

修道院に入ってこの世から自分を疎外して、信仰生活三昧という安易な道は、時に、高山にも比すべき信仰の偉人をうみだした。その反面、聖俗の区別を鋭くする傾向に拍車をかけた。神は、万人が神の子たちの聖化の生活をもとめておられる。水準を低くすることではない。むしろ修道院以上の状態が、全般に実行せられることこそ、神のみこころにかなうものであろう。

ボンヘッファーのような人物は、たしかに、聖化の生活における最もよい実例を与えたものと思う。彼は、ルターの理解したキリストに、もっとも接近した人の一人であろう。神は、聖者たちのうたうハレルヤの声よりも、罪人のうめき声をよろこびたもう。聖化の道においては、このうめきが、たえまなくきこえるのである。聖化の道は、逆説の道である。神秘主義の道ではない。神秘主義は神のなかへすっぽりのみこまれてしまうことをもとめる。しかし、これをうらがえせば、自分の神格化である。結局、ここでは、独語（モノログ）だけが、きかれるのである。聖化の道においては、うめきを聞く神をいつもわすれない。そこには、対話（ダイアログ）がある。神への没入ではなくて、神との出会いがある。神秘主義は、一方交通であり、聖化には、コンミュニケーションがある。神からのコンミュニケーションをうけつづけていく道こそ聖化の道である。

日本福音ルーテル教会議長　岸　千年

の間の平和をたもとうとしておいでになるのではない。最近の国際間の関係が、平和を希望しながら、これほど自分を中心にして動いていることであろう。全世界を支配しようとする野望が、どれほど人間を、かりたてていることであろう。そして、そのためには、手段をえらばない傾向が、どれほど濃厚に出ていることであろう。そして人間の短見が、どれほど、その術策に、まんまとのせられていることであろう。神は、どのような術策なら、用いたまわない。神との平和を実現するのに、神の最善のものを提供したもうのである。

しかし、注意しよう。神は、悪魔をも、支配し、これを、救いの一部に用いたもうことを。これは、神の術策だろうか。術策とは、悪と知りつつ、悪しき手術を用いて、悪しきことをたくらむことである。神は、悪を見抜いて、悪を骨抜きにするために、悪魔を利用なさるのである。神のなさることは、悪魔のすることの上を行くのであって、悪魔は、結局、神を敵にまわすことはできないのである。

キリストは、この世にあって、十分、この事実を証明なさったのである「わたしが神の指によって悪霊を追い出しているのなら、神の国はすでにあなたがたのところにきたのである」。神の国は「ここにある」とか「あすこにある」とかいったものではなく「あなたがたのうちにある」。これらの言葉は、はっきりしているようで、実はとらえるのに困難である。一見、何でもなく、きこえるが、見た目ほどに、容易には、とらえられない。ルターは、このことをよく理解していたので、神の国は、みすぼらしい姿のなかに、隠されているといっている。しかも、このような、みすぼらしさのなかに、宇宙を支配する力が隠されているのである。教会は、いまいちど、このすばらしい力を認識しなければならない。下僕なるキリストこそ、宇宙の主である。この宇宙の主が、教会の主である。宇宙の主の無限の力こそ、他の人為的力にまさることを、身にしみて認めなければならない。これが信仰である。

日常生活と聖化の問題

エペソ　四・一二―一六

キリスト者は、キリストを信じる信仰によって、神のみもとにおいて、一つに集められている。それと同時に、世界中に、散らされているのである。散らされていても、宇宙の主、キリストのもとにあっていつも、一つである意識をもっている。

集められまた散らされているキリスト者は、各自にあたえられた「わざ」をもちつつ、キリストを証しているのである。集められているのは、キリストを信じる信仰によって、神のみまえに立って、交わりに入れられていることであり、散らされているのは、キリストを証しする使命をもっていることである。ルターは職業は、神の面（マスク）であるといっているが、これを「カクレミノ」として神は、人間に近ずくということである。修道士だけに、神が、近ずくのではなく、台所に働く婦人にでも、工場で汗する工員にでも、農夫にでも、同じように、神は、接近したもうのである。このように、ルターが考えたとき、修道院は、空になった。隠遁が理想ではなくて、この世に生れ、この世において育てられ、この世においてキリストを証しすること、すなわち、隣人への奉仕こそ、キリストにあって新しい創造をうける者のつとめである。

言えた義理じゃありません。

夫「でもお母様……」

姑「お前は黙っていなさい。私は可愛い娘にこんなこと言われて黙っていられますか。そもそもですよ。お前たちが子供を置いて外へ遊びに出られるのは誰の為だと思っているのですか。子供がはしかになった時、お前たちは何もできないで、ただオロオロしているだけじゃありませんか。あたしが居なけりゃどうにもならなかったじゃありませんか。ええあの子はお前たちより、この私になついているんですよ、育児も家事もロクに出来ないで、それで母親でゴザイ、父親でゴザルというくらいばったって始まらないじゃないか。それでも、それが民主主義というもんですかね」

夫「そりゃ、そんな……」

嫁「いいえ、私にも言わして下さい。こんなこと日頃お互い同志いえないんですが、今日は山田さんもいて下さるし、私の言い分もきいてほしいと思うんです。そもそもですよ。」

カウンセラー「ホホー、そもそも？」

嫁「そうですよ、そもそもの私たちのなれそめの初めは、私はこの人が好きだったから結婚したんです。二人で思いきり好きなことをしてみたい。子供を何人生んで、台所には電気冷蔵庫を入れて、休日にはピクニックに行って、……といろいろ夢をもって結婚したんです。ところが実際は夫と暮している時間はごくわずかで、一日のうちの大部分はお母さまと暮さなければならない。それもこの家には妙な伝統というか、家風みたいなものがあって、私は一々それに従わなければならない。何一つ私の思うようにすることができないんです。例えばみそ汁の味一つにしたってうんと甘口でなければいけないっていわれるし、私は辛口で育って来たんですから、今さら甘口に馴れろっていったって……」

姑「そりゃ、あなた方が結婚する時から百も承知だったことじゃありませんか。一郎には私という者がついている。それを承知で来てくれるなら来て欲しいといって、あなたもそれをウンと言ったはずですよ。ネエ、一郎や」

夫「ハイ、そうでした」

姑「それごらん、一郎はチャンと覚えていますよ。この子は頭がいいし、素直な親孝行な子に私が育てたんですからね」

嫁「そりゃ、その時はそう言いました。でも結婚したら私の思うようにさせて下さる、出来たら母親と別居してもいいっていっていたくせに……」

一郎「ウン、そんなこと言ったかもしれない」

姑「私と別居するなんて約束したんだって、アラ、初耳だ、お前そんなこと愛子に言ったのかい」

一郎「ええ、いや、よく覚えていないな」

嫁「アラ、ズルイわよ、今更そんな」

姑「いや、わかりました。一郎、お前はこのお母さんはどうなったっていいというんだね。そうかい、そん子だったのかい。私はお父さんが亡くなってからお前一人を育てるためにどんな苦労したかしれやしないんだよ。女手一人でお前を大学にやって、立派に就職させて、やれやれこれでホッと出来ると安心していたのに、お前までがそんな気持でいたのかい。そうかい、それがアメリカ式の民主主義っていうものかね、親不孝を教えるのが今の学校のやり方なんだね、私に楢山へ行けっていうんかい。ウウ……（泣く）」

夫「なあお母さん、そう興奮しないで。僕は何もそんな、楢山行きだなんて言った覚えはないですよ」

姑「これが興奮しないでいられるかって。まるで飼犬に手を咬まれたようなものだよ。私なんて早く死んだ方がいいと二人で思っているんだろう。」

夫「とんでもない、お母さん。僕は、僕は……」

カウンセラー「いや、お互いに余り興奮しては正しい解決はえられません。お互いに相手

今月の家庭科

ロール・プレイ

嫁と姑の言い分



まえがき

嫁と姑の問題について、教会内の婦人会、会、若夫婦、その他老若合同の会の時などに、まロール・プレイを演じ、そのあとでディスカッションするために資料を示したい。このロール・プレイはすでに「結婚・家庭セミナー」や嬌風会において演じ、好評を博したものである。

四人の登場人物が舞台の上で椅子に坐ってこのせりふを読めばよい。

【人物】 非クリスチャンの家族

夫―三十才、一郎、四年前結婚、三才児一人あり

妻（嫁）――二七才、愛子

姑―五五才、のぶ、未亡人

カウンセラー（山田氏）（非指示的カウンセラー）

【情況】

知り合いのカウンセラーが、一夜この家を訪れたところ、話が日ごろの「嫁と姑」の問題におよび、三者こもごも訴えるという情況となった。カウンセラーは専ら聴き役に回り問題点の解明や理解に努力を傾ける。問題解決への指示はむしろ聴衆に求めるといった場面設定とする。

姑（のぶ）「だから、山田さん、さっきから言っているように、私は近頃の民主主義とやらいう新しい風潮にはどうしても納得できないのですよ。若い者が自分たちさえしあわせであれば、年寄りはどうなってもいいって果していえるでしょうか」

嫁（愛子）「いいえ、山田さん、そうじゃないんですよ。私たちだって人間ですから、年寄りや親に感謝したい、しなければならないということはわかりますよ。でもそれにはおのずと限度があります」

姑「限度って何です。愛や奉仕に限度がありますか？」

カウンセラー「まあそうムキにならずに、お嫁さんのいわれる限度という意味を聞いてみようじゃありませんか」

嫁「そうむずかしく改まって聞かれると、ちょっと困ってしまうのですけれど、私は……悪いけど、お母様の本当の子供じゃないでしょう。だから自分の親に仕えたり、愛したりするようにはとてもつとまらないんです。やっぱり私はこの家にとっては他人なんだと時々、フッと思ってしまったりするんです」

姑「他人？　他人とは何です。結婚して四年もたって今更他人も、他人行儀もないじゃありませんか。あなたは私の娘です。私は娘が一人ふえたと思って喜んでいるのですよ。それを今更他人だの、愛には限度があるなど、

上にあるものを求めよ



聖書「あなたがたはキリストと共によみがえらされたのだから、上にあるものを求めなさい。そこではキリストが神の右に座しておられるのである。あなたがたは上にあるものを思うべきであって、地上のものに心を引かれてはならない」

コロサイ三・一―四

何を求めるか

シェイクスピアは、この世界は男と女とが役者として劇を演じている舞台にすぎないと考えました。ローズ・クリーブランドは、この世界は市場であって、そこでわたしたちはただ単に売る人であり、また買う人であると考えました。そういう筆法でいけば、わたしたちは、この世界を狩場と考えることはできないでしょうか。そこにおいては人間はすべて狩人です。みなが何かをあさっています。何かを追いかけています。真理とか地位とか名誉とか富とか快楽とか、いろんなものを。そうすると、わたしたちキリスト者は、いったい何を求めながら生きたらよいのでしょうか。聖書は「上にあるものを求めなさい」といっています。

まずキリストを

では、上にあるものとは何でしょう。それは神の国と神の義です。もっと端的にいえば上にあるものの第一はキリストです「キリストは神の右に座しておられる。この神の右に座しておられるキリストにすべての秘決があります。このキリストを知り、このキリストを信じ、このキリストに従い、このキリストに学んでいく人は無限の富を与えられます。それは堀っても堀っても限りない宝を秘めている鉱山のようなものです。無尽蔵の恵みがキリストのうちに「隠されている」のです。

生れた時から盲目であった小さい男の子が医者の巧みな手術でいやされました。目が開かれたとき、この子どもは、しばらくあたりを見まわしていましたが、やがて口をひらいて「おかあさん、これが天国ですか」ときいたそうです。人がキリストの御手で魂の開眼をされるとき、確かに天につける消息を知るようになります。今わたしたちが知っているその消息はほんの入口だけです。だが、たえずキリストを求めることによって、さらに尊い恵みにあずかっていくことができます。

キリストにある品性

次に、上にあるものの中には、キリストのような品性があります。ヨハネ第一の手紙には「私たちは自分たちが彼に似るものとなることを知っている。そのまことの御姿を見るから」(三・二)といっています。キリストのまことの御姿を仰ぐことによって、人は天につけるものとされ、地にあっては彼のようになることを許されるのです。わたしたちがキリストを信じて、キリストに多く学べば学ぶほど、土の器のわたしたちも、キリストに似通うものとされるのです。

かってフレデリック大王が小学校を訪れ、小さい子どもたちの前に立ち、石を示して、「これは何界に属するか」とききました「それは鉱物界に属します」とすぐひとりの子が答えました。次に木の葉を示して「これは何界に」とききますと、他の子が速座に「植物界に」と答えました。そこで王は子どもたちのほうに身を乗り出すようにして「それではこのわたしは?」といいますと、ひとりの女の子がちょっとためらっていましたが「陛下は天界に属されます」といいました。王は涙

の立場をもっと考えましょう」

嫁「でも吉田さん。私たち日本の女性は今まで余りにも相手の立場や、他人の意見に従い過ぎたんではないでしょうか。言いたいこともいわないで、胸のうちにグッとかみしめるのが日本婦人の美徳だって教えられて来たのではないでしょうか。私そんなの嫌だ」あんまりみじめ過ぎるワ。戦後の女性が解放されたのは一体何のためだったのでしょう。私はお母さまのような古い道徳にはついて行かれません」

姑「お前さん。えらそうに古い道徳だ、新しい女性だっていうけれど、経済的にはどうなんだい。今時、二人で暮すとなれば家賃やその他で月一方円は飛んでしまうじゃないか。一郎の安月給で、その残りだけで暮していけるつもりかい。お前たちが大きな口がきけるのも、この家に住んでいるからじゃないか。これはお前のお父さんが建てた家なんだよ。それを家賃も払わず、ただで住わせてもらっていながら、有難うって言わないばかりか、やれ家風がどうの、子供のしつけ方が古いのと文句ばかり言っているじゃないか。一体そんなこと言えた義理かい」

嫁「経済的なこと持ち出されば一言もないんですけれど、これは一郎さんの罪じゃありませんわ。立派に大学を出て、一流会社につとめていながら、家一軒持てないなんて、社会が悪いんだワ、政治が貧困なのよ。一発何億円もするミサイルを作るにはヤッキになっていながら、私たち若夫婦が新婚の家さえもてないなんて、日本はいつまでも後進国よ。池田首相の所得倍増だって、物価や家賃が上れば同じことじゃない」

カウンセラー「なるほど、それも一理ありますな」

一郎「しかし、お前、今どきそんなこと言ったって始まらないじゃないか。とにかく俺たち二人じゃ暮せないんだよ。この家もおやじの財産だけど有難く頂戴したっていいじゃないか。それに別れたら誰がおふくろの面倒みるんだい。まさか一人でホッポリ出すわけにもいかんじゃないか」

嫁「アラ、割にはっきり言うわね。他のことでもそれ位はっきり意見を出してくれれば頼もしいところあると思うんだけれど。」

夫「そうさ、俺だって困っているんだ。お前の好きなようにさせてやりたいし、それにおふくろの面倒もみなければならないし、俺の立場もわかってくれよ」

嫁「そりゃわかるわよ。頭じゃわかり過ぎるほどわかっていながら、現実の問題としてどうしようもないのよ。私の立場だってわかってよ」

カウンセラー「なるほど、頭ではわかっていながら、気持はどうにもならない……。これはカウンセリングのケースですな」

嫁「そんなことといって万事悟った顔ばかりしていないで、一体どうしたらいいか教えて下さいよ。あなたはそれの専門家だったはずじゃない」

カウンセラー「いや、弱りましたな、私は主義として自分の意見を言わんことにしているのですよ。解決はやっぱりあなた方自身にあるので、あなた方が自分でこうだと納得しなければ、カウンセラーがいくらお説教したって無駄なんです。でも、今日の話し合いで、問題点がザックバランにさらけ出されただけでも有益でしたね。お互いがお互いの立場と相手の立場とを冷静に、客観的に観察することが解決への緒口ですからね。では私はこれで失礼します。」

姑「あら、もうお帰りになるのですか、何だかちっともわからないんですがね……」

カウンセラー「いや、これでいいのです。解決へのよき指示は、きっとここにいられる聴衆の皆様が与えて下さるでしょう。」

司会者「以上でロール・プレイは終りました。聴衆の皆さんが、自分の身を舞台の上におき、自ら役割を演ずる、そして考えるというのがロール・プレイの意味です。

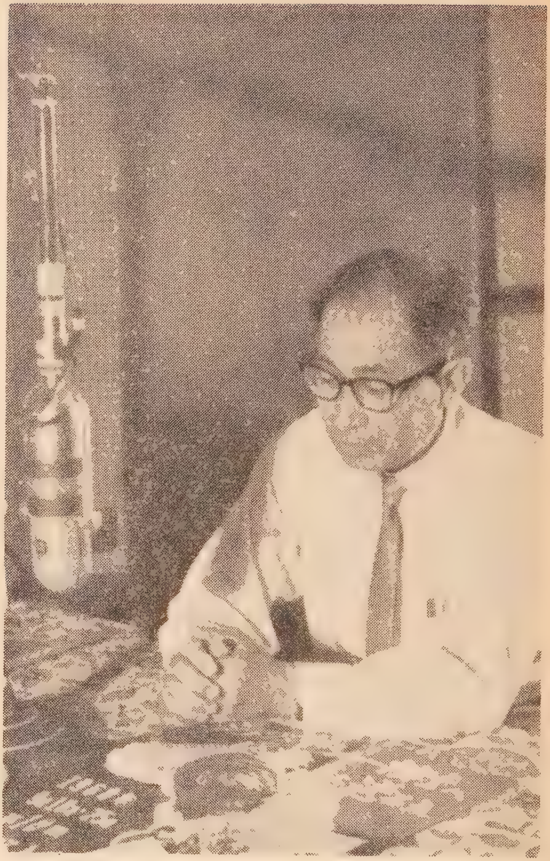
では何でもどうぞ御意見を。御質問でも結構です」

岩村　信二

原生林の中の日本館

対談

シュヴァイツァー病院医師　高橋　功
NCC教会学校部常務理事　外崎長三郎



外崎　この度、先生は休暇で帰国されたとうかがっておりましたが、

高橋　ええ、私ももう年ですので老眼がはじまりましてね、それと歯なんですよ。シュヴァイツァー博士が「なんだお前の歯は随分悪いんだなァー、日本に行ってなおしてこい」なんて云われましてね。

外崎　それじゃア先生、毎日引っぱり出されて時間がありませんでしょう。

高橋　ラジオ、テレビ、新聞などでしてね。こんな事予想もしてなかったもんですから、羽田を降りた時にはびっくりしてしまって、こりゃどうなるかと思いましてね。

外崎　休暇でとなると、また行かれる事になるのですが、シュヴァイツァー病院に行かれる時の始めのお約束は。

高橋　六カ月でした。それが、うぬぼれみたいですが気に入られたんでしょうね。それでシュヴァイツァー博士が私の家内を呼んだんです。つまり長くいてもらいたいためらしいのです。家内と一緒にいるのは医師の中では私一人なので気がひけましてね。(笑)それから家内が来ました為に、日本から看護婦やその他女性たちから奉仕したいというのがシュヴァイツァー博士のところに来ますが、あちらの気候はとても日本女性が生活できる状態ではないのですね。

を流さんばかりに感動して、どうか自分も国民もみな天につける市民であり、それにふさわしく生きることができるものでありたいと答えました。幼い女の子は偉大な真理を語ったものです。そこには鉱物界よりも植物界よりも動物界よりも（いや、この文化世界よりも）高い世界があります。わたしたちは、キリストにあって、神の子なのです。その品性の中にキリストに似るものがにじみ出て来なければなりません。

上にあるものを思うこと

わたしたちは上にあるものを求めねばなりません。聖書には「上にあるものを思うべきで」あるともいっています。求めることが実際の行動であれば、思うことは内的な態度です。キリスト者は、上にあるものを追い求めると共に、もっと深い所で上にあるものを慕い求める心で満たされていなければなりません。聖書はその理由を挙げて「あなたがたはキリストと共によみがえらされた者である」からといっています。

もぐらのような生命があります。それは暗い穴の中をうろつきまわる生命です。また爬虫類のような地べたをはいまわる生命もあります。そうかと思うとわしのように大空に羽ばたく生命もあります。もしわしの生命をもぐらの中に入れるとしたらどうでしょう。きっと上に向かっていこうとするにちがいありません。反対にわしの中にもぐらの生命を入れたら、おそらく暗いところをうろうろすることでしょう。人間はもともと暗い、はいまわるような生命しかもたなかったものです。しかし神はキリストにおいて、わたしたちに復活の生命を与えてくださいました。キリストの復活は朝日が堂々とあたりのやみを打破って中天高くさし上るように、暗黒の死を征服されたものです。このキリスト内に宿すものは、地上のことばかりに捕えられてはなりません。高くまなざしを天に注いで、上のものをしきりに思いかつ求めねばなりません。

上にあるものを求めるみち

最後に、どうすれば上にあるものを求めることができるか。わたしたちは、地上の一時的なものが永久の天につけるものに変えられるということについて学びたいと思います。

ここにお金があるとします。それは地上のもので、一時的なものでしかありません。だが、その投資のしかたひとつによっては、それを不滅なものに変えていくことができます。もしそれを伝道のためにささげ、神なき人々にキリストを与え、永遠の生命にその生たちをもたらすことができるならば、わたしたちの用いたこの世的なものが実に永遠的なわざをすることになります。同じように、わたしたちの小さい才能であっても、わずかな時間であって、これが神のためにささげられるならば、わたしたちはそうしたものをもって不滅な神の事業に参画することができます。こうして、わたしたちは、上にあるものを求める(宝を天に積む)ことができるのです。

わたしたちが世の人々のように、ただ地上のものにだけ心を引かれ、地上のものに対する思いだけで心を満たされ、気ちがいのように地上のものばかりを追いまわしているとすれば恥ずかしいこと。聖書は「地上のものに心を引かれてはならない」と戒めています。地上のものは、それがどんなに美しい良いものであっても、一時的であり、滅びるものであります。富であれ名誉であれ快楽であれ、そうした地上のものは、ほんとうに人の心に満足を与えるものではありません「いのちなき砂の悲しさよ、握ればはらはらと指のまより落つ」。まことのいのちのないものに真の喜びのありえようはずはない。わたしたちは現在、今、どのようなものに心を引かれ、どのようなものを求めて生きているでしょうか。わたしたちが営々として積みあげているものが、永遠者の前に、ちりやあくたに等しいものでなければ真に幸いです　（山内　六郎）

CS部ニュース

第二サイクル 一九六二年のカリキュラム

本年度をもって三年間を一還した綜合制カリキュラムの一サイクルが終るので、かねてから、第二サイクルに入るために第一年度分の部分修正の検討をして来ていたが、ようやく九月八日の午後十時半に最終検討を終え、各科整理の上、第二サイクル第一年度分のカリキュラムとして出版されることになった。つづいて第二年度の検討に入ることになっているが、特に第一サイクルを使用してみての御意見があれば、NCC教会学校部宛に参考としておよせ下さい。

なお一九六二年度カリキュラム要目は限定版で二〇〇部しか発行いたしませんため御希望の方は至急御予約下さい。（価　二〇〇円〒実費の予定）

教育週間献金の初穂

日本キリスト者医科連盟では、総会の席上献金を第11回キリスト教教育週間の献金としてささげますと、一〇、五四二円を当教会学校部に持参された。なおキリスト者医科連盟に属している医師の中で教会学校部に加盟してない教派の教会員の方々が、私共の教会でもこの教育週間を行ってもらいますとポスターや趣意書を持って行かれ、今年度の教育週間は、プロテスタントの大小ほとんどの教派が参加するので、日本中の各所でまもられることになりました。

教育週間各地での行事

今年の教育週間に当り各地で生徒大会が開かれている模様だが、当部に入った情報では、

九月一七日
北海道美唄部会（市内パレード）
会場　美唄教会
大阪教区中高生大会
会場　天満教会
九月二四日
東京部会連盟
会場　青山学院PS講堂

高橋　それを私たちも考慮しましてね、野村先生と二人で病舎をと案を出そうと思っていましたら、シュヴァイツァー博士は、今一番緊急に必要な薬を買わしてもらうとあまりにハッキリ云うので、私たちも病舎のことが云えなくなっちゃったんです。そこで野村先生と相談しまして精神病舎を建てることや癩村で病舎増築の話を聞いていますので、それをと希望を出していますが、そうなれば CasaJapone（日本館）ができるわけです。

外崎　形が残れば子供たちが大きくなっても夢が実現してるわけですから……それからアフリカに帰られて洗礼をお受けになるとか聞きましたが。

高橋　一九五九年にその希望を出しましたところ、ヨーロッパ旅行の出発まぎわでしたので帰ってからということで待っていましたら、一九五九年の大晦日に帰られたのです。そして後、家内がアフリカに来ることになり一緒にというのでのびていました。そしたら、ある時シュヴァイツァー博士が聖書を読んで……私はよく聖書のことを知りませんので聞きちがいかも知れませんが……キリストは一二人の弟子には洗礼を授けなかった。彼らは洗礼を受けなくても神のみ心を知り神の道をとくことが出来たと……そこで私は洗礼のさいそくをしにくくなって渋っていたら、日本への帰国打合せの時、シュヴァイツァー博士は、私は決して忘れていない、お客のいるときはいやだが、一〇月から一二月のうちに、それも家族だけで、と云ってくれました。

外崎　それは、私たちにとって嬉しいニュースでございます。それではお元気でお働き下さい。キリスト教関係者は声を大きくしてシュヴァイツァー博士によろしくと云っております。

高橋　確かにお伝えします。家内も待っていることでしょう（笑）

この対談はラジオ東京の「生活の栞」のために収録したものです教育週間ニュースとしてここに記載しました。提供ＡＶＡＣＯ

私の家内がよばれたのは、家内だからで、日本の女性としてではないんですよ。大変お気の毒だけれど皆おことわりしました。

外崎　先生がシュヴァイツァー博士のところに行かれた動機は、

高橋　私は第二次大戦中八年間軍医として南方の各地にいって未開発地域の黒人や土地の人のようすを知り、帰ってきてから、このような未開発地帯で何十年も前からシュヴァイツァー博士がやっていることを知り感激し、当時洋書の手に入りにくいのを無理して注文したり研究していたら、あるところからシュヴァイツァー博士のことを書いてくれと頼まれて書いたその原稿料を、私たちは貧乏しているが、これはシュヴァイツァー博士のために用いましょうと云って献金したわけです。そこからシュヴァイツァー博士との文通がはじまったのです。一九五四年に野村実先生がシュヴァイツァー博士と一緒に働いておられ、野村先生が日本からの医者に高橋がよかろうと推薦してくださったのですが、その時私はちょうど戦争中中断されていた博士論文の最中でしておことわりしたのです。一九五八年にベルリンでギター音楽会議があって、名指して招待されたものですから、その時にランバレネに行って旅行者としてでなくお手伝いしたいと野村先生を通して申込んだわけです。そしてその年の一二月から六カ月の予定が今までになってしまいました。現住所はランバレネ、本籍は日本です。

外崎　私共信仰浅いものですが、その立場にない先生が、医療奉仕の中に入られた事に敬服しているのですが、キリスト教に対して思いを新にされたと存じますが。

高橋　シュヴァイツァー博士は三〇才の時、宣教師のパンフレットに重要で緊急な問題は医療問題である、とありその最後に「主よわれ従わん」と答えるものを求めているとあるのを見たのです。それでシュヴァイツァー博士は「主よわれ従わん」という気持でアフリカに行ったのです。ところがねシュヴァイツァー博士はプロテスタントでしょ。フランスはカソリックの国ですね。それでシュヴァイツァー博士がアフリカに渡ることが問題になり、直接の意味の布教をしないのならアフリカ渡航を許可しようというので、シュヴァイツァー博士は、もっぱら医療奉仕をされたわけです。それで教会はなく、日曜の礼拝は軒下で担当のものが聖書を読み讃美歌をうたって……自由な宗教の立場です。癩村にカソリックの教会がありますが、それも患者が建てたもので、シュヴァイツァー博士は自由にさせています。

外崎　毎年行われているキリスト教教育週間は、昨年第10回で教会学校部が主になって「シュヴァイツァー博士のところへ医療品を送ろう」という運動を起し二五〇万円、六九二一ドル三七セントを日銀の許可を得て送り出したのですが。

高橋　私が日本に帰って来た後でシュヴァイツァー博士のもとに着いたそうです。日本は貧しい国と聞いていたのに、このような漠大な献金がよせられたことは、まことに信じられない。どうしたわけか、と驚いていられたそうです。

外崎　そうですか、この教育週間で日本の青少年の目を海外に向けさせようということであったのですが、その教育的な意味が達せられてまことに嬉しく思います。献金者の内訳は幼稚園三六〇園、キリスト教学校六〇校、教会学校八〇〇校が参加しています。

高橋　そうですか、こうした広い日本中からの声を心をシュヴァイツァー博士はよく聞こえると云っていますよ。シュヴァイツァー博士は日本びいきでしてね。

外崎　この献金は何にでもお使い下さいと云えるのですが、子供たちの夢として何か形として残るものをと思っていますが、

クリスマス

の

御用意はいかが！

こども
リーフレット

美しい４色刷の各科のカバーが出来ました。第１回入荷分は御予約などで品切となりましたので，間もなく第２回目が入荷しますが，クリスマスに御使用の教会学校は必ず御予約下さい。

毎月の教材

なかよし…………幼稚園用…………聖和短大附属幼稚園教諭達
こばと…………１～２年用…………中嶋渼子先生執筆
こひつじ…………３～４年用…………矢崎健一先生執筆
光の子…………５～６年用…………田坂惇巳先生執筆
若草…………中学生用…………小林宏先生執筆

昭和二十八年八月十日第三種郵便物認可
昭和三十六年十月一日発行
発行人　山北多喜彦
印刷所　精文堂印刷株式会社

教会教育　第九九号

定価五〇円（〒共）
半年分　三〇〇円
一年分　五五〇円

発行所
東京都中央区銀座四の二
日本基督教協議会　教会学校部
振替東京九八七一三番